The『Shinsai』
―出版クリエイター80人の震災体験と提言―

アミ編集者学校７周年記念

The『Shinsai』
―出版クリエイター80人の震災体験と提言―

編集・発行／アミ編集者学校事務局

目　次

シンポジウム

パート1
関西の編集長が語る震災体験 …… 2
パート2
地域情報誌の明日を語る …… 26

アンケート

出版クリエイターの震災体験と提言

パート1　被害 …… 58
回答者4人へのミニ・インタビュー …… 74
パート2　提言 …… 82

あとがき …… 99

symposium
パート
1
関西の編集長が語る
震災体験
THE KOBECCO
月刊神戸っ子
WATCH
Reset
KOBE
毎日新聞
応援したい 私も
多くの善意
大きな励み

地域の情に報いる雑誌づくり

パート1

■コーディネーター

池田　知隆

（毎日新聞学芸部副部長）

体験としての震災

池田＝こんにちは。池田と申します。毎日新聞で主に文化面の仕事をしております。

私にとって、阪神大震災とはなにかといったら、こういうコーディネーターや、座談会のお膳立ての仕事ばっかりしています。地震発生の時、私自身は京都に住んでおりましたけれども、本に埋まっただけでした。

一月十七日に[*1]日米都市防災会議が始まるということで、偶然にも大阪国際交流センターに日本とアメリカの主な地震学者が勢ぞろいしていました。その学者先生を集めて緊急座談会をやろう、それが、私の最初の仕事でした。現地からヘリコプターで刻々と電送写真が送られてくるのを、日米の地震学者の皆さんと一緒に見ながら分析して、この地震をどうとらえていったらいいのかということを考えるのが、私の地震報道の始まりでした。

京都大学防災研究所の先生が、この写真を見ながら、これはたいへんなことになる、新聞社はこの事件に対して相当の覚悟をしなくちゃならないと言われました。ロサンゼルスタイムズは、去年の地震の時に『プロジェクト・リバウンド』をやっていた。つまり、一年間被災の住人とともに歩きながら報道し続けた。そういう取り組みをやってほしいと、当日の段階で言われました。

それをすぐ会社に持ち帰って、翌日の紙面に向けて座談会の内容をまとめながら、[*2]『希望新聞』というのを立ち上げます。『希望新聞』はこれまでの新聞のあり方とは違ったコンセプトで、今なおしつこくやっております。そういうことが私の最初の仕事でした。新

聞社の報道のあり方、それからこれまでやってきたこと、これからやること、いろんなことを考えさせられました。

それと同じように、地域情報誌の皆さんもそれぞれの仕事を通して、また個人的な問題を通して、いろんなことに直面したかと思います。

地域情報誌とはいったいなんだろうかと考えたときに、いろんな捉え方があると思います。コミュニティペーパーという一つの考え方もあるでしょうし、街の遊びの情報を提供してくれる雑誌なんだという捉え方もあるし、地域の応援団という捉え方もあるでしょう。でも情報という言葉を見れば、これは〈情けに報いる〉ということでもあるわけですね。いわゆる〈地域の情けに報いる雑誌〉、それが一つの原点になるのかもしれないと思います。

今回の震災は、住民にとっていったい何が必要な情報なのか、また、私たちは何を伝えていかなくちゃいけないのだろうかということを、考えさせられた体験だったと思います。

今日集まってこられた方は、雑誌の性格は別々ですし、共通の思い、共通の議論を展開するのは無理かもしれませんけれども、それぞれの編集者の皆さんが、今度の震災を通じていったいなにを考え、これからどういう雑誌をつくろうとしているのか、そのへんからまず聞きたいと思っています。

*1
日米都市防災会議

この会議は、日米の地震、都市防災関係の研究者が相互の研究成果を披露し、情報交換する場で、第4回目。1994年1月17日に起きたロサンゼルス・ノースリッジ地震から1年目の17日から、大阪国際交流センターで開催されることになり、地震関係者が集まっていたが、開催日の朝、阪神・淡路大震災が発生した。参加予定者の多くは、翌日18日から現地調査に入った。

*2
希望新聞

毎日新聞では「被災者の気持ちを前向きに」との願いをこめて『希望新聞』の題字をつけた、被災者のためのページを19日付け朝刊からスタートさせ、1年間続けた。そこでは、まず被災者が生活を立て直すために必要な、役立つ情報の提供、被災者の心のケアと被災地外の人々とのパイプづくり—などをこころがけた。当初は、従来の新聞作りのルールをいくつか破った。その一つは、繰り返し報道で、相談窓口などの情報が「読者に必要」と思えば、何度でも掲載した。レイアウトよりも情報量で、その日に必要な情報は可能な限り掲載するようにした。その新聞づくりは、いったいだれの情報をだれに向かって発信するのか、足元から考えていく試みであった。

助け合って生きることに気づいた

小泉　美喜子
（『月刊　神戸っ子』編集長）

小泉　神戸には絶対地震がこないと自負しておりましたら、たいへんな大震災がやってまいりまして、ほんとうに晴天のへきれきというか、驚愕というか、油断というか、たいへんな思いをいたしました。私は旧居留地の、神戸市役所の隣の隣のビルで、八階建てのマンションの六階に住んでおりまして、二階と三階とがぺしゃんこになりました。ですから出られなくて、十二時間ほど閉じ込められて、レスキュー隊に助けてもらいました。

部屋のベッドの上にタンスやなにかが重なっているのを乗り越えて窓側まで行きまして、下を見ましたら、ビルの下の階が潰れているのが、初めてわかったんです。これはすごいことだなと思いました。そこは兵庫県の住宅供給公社のしっかりしたマンションですし、絶対潰れへんと思ってたんです。

私は疎開児童なので、岡山で小学生のころに地震に出合ったことがありまして、その時の記憶がありました。その経験から、ここにいた方が大丈夫だと思っていたんですが、全然だめだったんです。

救助された後、市役所のロビーの避難所に入りました。マンションの人たちは、六時半ころに読売新聞の配達のお兄ちゃんが全戸をノックし、扉を金属バットでたたいて一人ずつ救出してくれたんです。大都会のまん中のマンションはすごくお年寄りが多いんですね。そういう人たちを救ってくれたのが若い人だった。みんな市役所に連れて行ってくれたもんだから、今まで見たこともなかった人たち——八階建てのマンションだと、日ごろまったく顔なんて合わさないんですね、その人たちがみんな、お年寄りも子どもも犬もやってきておりました。

そこでおにぎりを食べて、避難所暮しを一週間ほどしたんです。そういう中で、みんなが助け合って生きるということ、こんなことを今まで忘れていたんだなと気付いたんです。なんとかこの気持ちを伝えていかないといけないと、強く思ったんです。

神戸のまちは壊滅状態だった

十九日からトアロードにある編集室へ入りました。そこもガタガタでたいへんだったんです。編集部員も三人ぐらい来ました。電気も、ガスも、電話も、水も、なんにもこない状態で、ほんとうに寒いときでしたし、その中でなにを始めるかということだったんですね。

うちはいつも二月がお酒の特集号になっております。お酒の特集と、神戸の経済人と文化人の人番付というのをやっておりました。酒のほうは、戦後五十年で、灘の戦後史と、これからどうやっていくかということを、菊正宗さんとか、沢の鶴さんとかに話していただいていたんです。十五日に座談会をしてすぐあとに地震がきたもので、すごかったなと思うんです。

うちはちっちゃな商店を主体とした本です。『元町通り』をスタートしたのが昭和三十五年です。テレビが始まったばかりのころで、三十ページくらいの本を一年間発行しました。そのころのスポンサーさんが、（神戸っ子の）元になっております。

そこで、町を歩いてみて、一軒一軒お見舞いに行こうということになりました。『元町通り』から『月刊　神戸っ子』になって、三十四周年の三月号に移るというところだったんですが、二月号と三月号を合併してつくろうということになりました。

お店回りをしましたら、町中が地震にやられておりまして、お店も全然開いていませんでしたが、なんと元町は元気だったんです。トアロード、センター街はすさまじい状態で、どうなるかというほどだったんです。センター街には『センター』という本があり、テリトリーがあるものですから、私たちはそこいらのお店には割り込まないようにしておりましたので、まあまあ、ちょっとよかったなと。地下街は大丈夫だったんですね。これならやっていけるかなあなんて、かすかな望みを持ちながら、帰って参りました。

イチからやる決意をした

一週間くらい、どうするか考えました。印刷所は大阪だったので救われたことと、編集室が半壊ですんだものですから編集ができたんです。仕事場が残っていたことほどありがたいなと思ったことはありません。『神戸新聞』、（社屋が）潰れました。資料があの中に全部ある、あれはほんとうにたいへんだったと思います。

ラジオ関西が安否情報をずっと流していまして、避難所ではすごく励まされたんです。やはり〈励ます〉ことをやらなくてはいけない

んじゃないか、それをやろうよと考えました。

創刊号から二年ほど、司馬遼太郎さんに神戸のルポルタージュを書いていただいていました。司馬さんはそのころ直木賞を受賞したばかりで、産経新聞の学芸部次長さんでした。私たちは司馬さんのルポで、神戸がどんな町かを勉強し直したことがあるんです。それで司馬さんにお願いしたら、書いてくださるということになりました。

田辺聖子先生にも書いていただいた。日ごろのお付き合いが生きたのです。創刊以来積み重ねてきた、編集者と作家、編集者と商店、スポンサーの方々との長いお付き合い。その中で励まし、助け合うのが今じゃないかと思ったわけなんです。

地震という戦災に近い状況は、ゼロに戻ったようなことで、イチからやろうと思ったわけです。その決意というか、覚悟というか、これがいちばん私にとっては素晴らしいことでした。

激励の号外を持ってお見舞い

二十五日にはお二方の原稿が届きました。その原稿で号外をつくりまして、スポンサーのところへ走りました。潰れていて戸が閉まっていたら、「お元気でしょうか」というお見舞いを貼りまして、一軒一軒回ったわけです。激励文を読んで、みんな泣いて喜んでくださったんですね。その時に私は、言葉の力というものがいかに強いかということを思いました。

「ぼくらも頑張るけど、あんたらも頑張れや」「一緒に頑張ろや」という言葉を、商店の人たちからいただきました。その時は「頑張ろな」というのが切実でした。「励まし合っていこや」という感じがあったんです。

全国のタウン誌の連中二十社ほどが義援金を持って会社に来てくれまして、一月三十一日の給料がそれで払えたという状況でした。集金に行っても店が開いてなかった時に、二百万円も持ってきてくれたんです。私たちは一軒一軒営業してやっていかないと出せない雑誌でございますから、みんなからの義援金がほんとうに生きたと思っております。先日も広島で全国のタウン誌大会があったんです。被災者やのに、うちが事務局で頑張らしていただきました。それは皆さんの応援、励ましがあったからできたことなんです。

スポンサー回りを始めた時も、いろんなところから「励まし広告」をいただき、「今、ぼくたちは元気ですよ」広告も出してもらいました。例えばホテルなら、「もうじき再開しますよ」と入れる。それから名刺広告もいただきました。ど

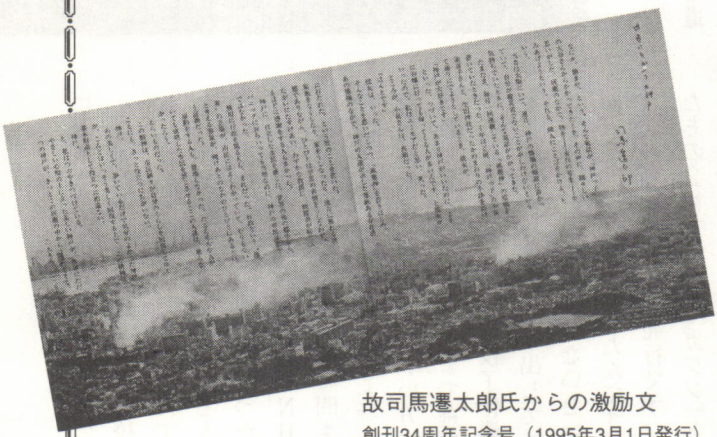
ういうふうに元気なのか、一言を入れてもらうということでスタートしました。激励文は、関西や東京の方二十七人からいただきました。その時、神戸は皆さんからたいへん愛されている町だと感じました。皆さんの気持ちに応えた編集をしないといけないと思いました。

厳しすぎる現実は掲載できない

うちの米田カメラマンが地震の三十分後から親子で撮影に走っておりました。長田に住んでいて、三軒先まで燃えてきたんですけれど、なんとか助かったんですね。山に登って撮影したり、火の中を神戸じゅう走り回って撮った写真が届いたんです。その写真を載せたんです。

ただスポンサーからは、自社にダメージを与える写真は載せてくれるなといわれたんです。これはうちのつらいところだったと思うんです。「これを載せないでほしい」といわれたときに、広告をいただいているものの限界があるなと思いました。これは今でも続いております。

現状のすさまじさを語れば語るほど、義援金は集まるかもしれないけれど、ショッピングには来ていただけないし、食べには来てもらえないという状況です。今も観光客が来なくて、皆困っているわけです。ホテルはガラガラです。うちは「元気でいこうよ」をテーマにやっていく。むごい現状ではなくて、希望的観測のある原稿というものでいきたいと思います。



故司馬遷太郎氏からの激励文
創刊34周年記念号（1995年3月1日発行）

『月刊　神戸っ子』
昭和40年1月20日創刊
毎月1回1日発行
印刷／ナニワ印刷（株）

校了するのが精一杯だった

江　私たちの会社は本社が大阪なんですけれども、神戸新聞グループの出版部門の一部門が独立したという形で、阪神間および神戸のスタッフが非常に多くいました。ぼく自身も今住んでいる家が中央区山本通り四丁目、諏訪山になるんです。地震の時はほんとうにひどくて、割れるものが全部割れまして、残っているのがお箸ぐらいという状況です。

母方の実家が中山手通り三丁目にありまして、地震の後すぐ行って確かめたんですけれど、全壊です。住んでいる人間は全員無事でした。隣の小さなマンションは一階が潰れてまして、道に転がっているという状況でした。中に人がたくさん埋まっていまして、救助作業がうまくいかなくて、一家全員お亡くなりになった家とかありました。建物が倒れてそうなったのか、ぼくが行ったときはまだ道が熱いという状況でした。

仕事どころではないなあというところでしたが、公衆電話はよくかかって、編集部に電話をかけてスタッフとか外部の部員の安否を確かめたりとかやっていたんです。二、三日は避難所に行ったり、家に帰ったりというところでした。

江　弘毅
（『ミーツ・リジョーナル』編集長）

編集仲間の励ましで出した

地震が十七日に起こって、校了が二十日と二十一日だったんですね。編集長という立場上、どうしても出なあかん。歩いて行ったろかと悲壮な気持ちで夜中にNHKの前まで行きまして、一時間半くらいタクシーを張ってました。（ドライバーは）非常に優しい方で、それで友達の大阪の家まで逃げ、そこから会社に出て、校了作業をしました。今から思い出しても、地震のことは思い出せないというか、そういう状況だったんです。

次の号が三月一日発行です。私たちの会社では『Lマガジン』というスケジュール中心の本がありますが、『ぴあ』とか、『関西ウォーカー』とか、その『Lマガジン』とかに比べて、『ミーツ・リージョナル』は特集ページが取れる。我々はぺっしゃんこでして、特にぼく自身が、もう校了するのが精一杯、

次の号を出すのが精一杯という、情けない話ですが、公私共々むちゃくちゃになっていました。

その時に、『ぴあ』の副編集長の石原君から連絡があって、「こんな時にページ割いてできるのは『ミーツ・リージョナル』だけだし、ぼくらも何かやりますよ」という。お互いの無事を確認し合いながら、何かやろうということになりました。三月一日号は一月二十六、七日くらいの締切だったんですけれど、彼が足でいろんな原稿を集めてくれまして、それを載せたところすごい反響でした。社内的にも『ミーツ・リージョナル』は震災に五、六ページ割いてかまわないというようなことで、四月一日、五月一日号と「被災地からの便り」をやりました。

我々の雑誌では、街の人間および、店の活動であったり、なんらかの芸術活動であったり、そのあたりの人間を取り上げています。読者も含めて五十人をピックアップして、レポートしていただいています。震災後、三宮の周辺に屋台が出ていて、ぼくらもそこでご飯食べたりしていたんですけれども、津村喬さんが「屋台の応援団」というのをやっておられましたので、津村さんに原稿をお願いしたり、柔軟な本でしたので、幅広く対応できたという形です。

本をつくることの辛さを励ましてくれた読者

それと手紙が何通かきていまして、印象的だったのをご披露したいと思います。うちの雑誌の中で「街のNG特集」というページがあります。ペラペラした消費至上主義を大真面目に揶揄しつつ、ブラックユーモアで笑ってやろうというページです。街のNG委員会というのがありまして、その一人の方からの手紙がすごく良かったので、ご披露したいと思います。

――こんにちは。新しいNGを送るつもりでしたが、地震があり、不安定な気持ちが続いていて、いまだ目覚めぬといった感じです。

二月一日発売分が本屋さんで並んでいたんで少しほっとしました(出ないのではと思っていました)。『ミーツ・リージョナル』は関西に深く関わりのある内容なので、編集部の方々や、本に出ているたくさんの方たちが、辛い気持ちではと、落ち着かない気分です。こんな大きなことが起きた後、地元と密接な関係にある本を進めていくのは、とてもとてもむずかしく辛い作業なのではないかという気がしました。

こんな時、次号の内容がいつも通り進むのかどうか、素人の私に

はわからないのですが、もしいつもと変わらず進めていくのが本をつくる仕事の方針ならば、きっと心を痛めながらなのでは、などと考えたりしています。

それでも三月一日に出る分が休みになったりしたら、とても悲しいです。そう思うのは、私は読む側として『ミーツ・リージョナル』という本が、今度の地震のいろんなことを、他の雑誌や週刊誌とは違う伝え方や、ほんとうに大切なこととかを、文章でなくても表してくれそうだなと期待しているからだと思うのです。

こんな内容のものを出してよいのかどうか迷いましたが、もし本をつくる側の方々が心を痛めているのだったら、なにか励ますというようなことが言いたかったのと、私の周りではもうすでに「地震ネタなんて」と平気で言い出す人がいたりで、多分『ミーツ・リージョナル』という本をつくる方たちや読んでいる人たちは、絶対にそんなこと考えたりしないのではと、救いを求めるような気分でしたから。

自分勝手に先走る内容になってしまったかと思いましたが、まるでなにもなかったかのようにNGコーナーへ出すことができなくて、それと、こないだのどれもつまらない内容だったのに載せていただけたお礼もかねたいと思いました。

ブラックユーモアの非常に効いた投稿をしてくれる常連さんなんです。そのあたりで、本を落ち着いて出すことの意味というのを考えたりしました。

被災とシャネルの同時代性

今いちばん考えているのは、今度の地震で、地元の雑誌で何をやっていくのかということについてなんです。例えばぼくの友達はジャズ・バーをやっていたんですけれども、住居は全壊して、店は残ったんで、その二階に住んでいる。昔でいうとバラック、いまでいうとプレハブの仮設を建てて、てんぷら屋さんをやっている。そんな中で、例えばパリコレでジャン・コロナの服がすごい良かったとか、いまここのディスコ・クラブではどういう曲が流行っているとか、このカフェが流行っててそこで出されるワインの銘柄が云々とか、ぼくらはそれを書いたり紹介したりしている。

そういうぼくたち、そんな本を出すぼくたちだって、地震で被害に遭った。母親は男兄弟が全部戦争で亡くなって、ぼくらが見ているんですけれど、その家が更地で放ったらかしのままで、測量もし直していない状況です。

なにをどうがんばっても根本的解決になれへんのちゃうやろかと思ったり、被災者の側としては、

なにをやってもらっても、本質的なところで根本的解決にならないんじゃないかと思ったりもします。

戦後五十年経って高度経済成長を経て、消費することがいちばん楽しいみたいなことで、アルマーニやらなんやらを買ったり、外車に乗ったりしていて、はたして（震災に対して）何がでけるんかなと思った時に、何もでけへんかった。そういうのがなんとなくボーンと心の底にあるんです。

けれどもそういうことを考えるよりも、神戸でなんかやっている人たちのことを伝えることが、同じ時代性、シャネルが流行っているとかいうのと同じ時代性の中にある。そしてそんな同じ時代の中で、やっぱり生きてて良かったみたいな、そういうことができればと、神戸の特集を八月一日で出したんです。

『ミーツ・リージョナル』
1990年5月29日創刊　毎月1回1日発行
発行／京阪神エルマガジン社
印刷／凸版印刷（株）

一号ジャンプした

奥村　十七日は伊丹の自宅におりまして、最寄りの駅が潰れたっていうだけです。幸いにも私の住んでいる周りはさほど被害はなくて、揺れがおさまって光が出てきて、状況がわかるにつれてまず思ったのは、神戸はえらいことになっちゃったなというのと同時に、どうやって会社に行こうかな、といったことです。電話が通じない、電車が通じない中で、出社は十八日からということになりました。まず、今進行中の本をどうやって出そうかと考えました。

地震があったのは十七日、出社したのが十八日、翌週の火曜日、二十四日発売の号が、すでに下版の作業に入っている時です。校了作業が終って、あとは工場さんにお願いします、ぼくらはもう一切手を付けません、よろしくっていう状態に、入っていました。十八日に出社してすぐに工場に電話して、全ページに「兵庫県南部地震の影響により掲載している情報の一部に不備がある場合がございます。ご了承ください。」と、これを全部入れろという指示を出しました。

同時に被害の状況がわかってくるわけで、十九日になると、我々の予想してたよりも相当な被害がある。犠牲になられた方も非常に多いとわかった時に、これはクレジット一文入れただけで済むというもんじゃないと考えました。

二十四日発売号は、巻頭がお好み焼きの特集をしていました。大阪、京都、神戸を中心としたお好み焼屋さんが七、八十軒載っている。神戸でいちばん多かったのが長田区のお店なんですね。うちのお店紹介のパターンは、お店の人に必ず登場いただいて、その魅力をアピールしてもらいます。雑誌の中では笑顔で出ている方が、ひょっとするとそのお店の方で、ひょっとしたらひょっとしているかもしれないということは当然思うわけです。そういったページを出しておきながら、欄外に「一部不備があるかも知れません。ごめんなさいね」というものでは済まないだろうと考えました。

奥村　準朗
（『関西ウォーカー』編集長）

個人的な思いとサラリーマンとしての責任の間で

その時に私が会社に対して取った方法が、申し訳ないけど二十四日売りをやめたい、一号ジャンプさせてくれ、ということだったんです。出版屋というのは雑誌を出し続けることが宿命としてあるわけで、それが最小限あるいは最大の責任でもあるわけですね。その責任を放棄するのは、雑誌屋としては失格なんじゃないかっていうこともあるんですけれども、当時それしか方法がなかっただろうというのも事実です。

角川書店は東京資本です。我々も出先機関として関西にいるに過ぎない人間で、私もあと何年かしたら多分東京に戻るだろうと、そういう人間です。それでも関西人のつもりで生活している私にとって、東京本社のあり方とは、しょせんやっぱり対岸の火事なのだなというのが、正直な感想です。『関西ウォーカー』は定価が三百円です。現在四十五万部出しています。広告が少ない号で四千万円、多い号で六千万円、そういう雑誌です。つまり一号の売上がだいたい一億二、三千万円ある雑誌なんです。

私、編集長でございますけれども、社内では一課長代理の身分に過ぎないわけであって、その独断でやめるということは、はっきり申し上げてクビものなわけです。東京の営業は当然そんなことは許さない。もうひとつ例を上げれば、たとえば表二、表三、表四に入っているクライアント、これは電博さんが担当している。つまり一号ジャンプするということは、電博から一号の権利を奪うことになる。そんな馬鹿なことができるかと、広告もぎゃんぎゃん言う。

でも、街の元気を読者に伝える使命を持つ媒体が、今この形で出すべきではないだろうというのが、そのときの判断でした。木曜日まではがたがたしまして、印刷は金曜日なんですね。雑誌つくりはいろいろお金がかかるわけですけれども、いちばんお金がかかるのは輪転機が廻って以降です。写植を打ったりとか、製版したり、そういったものは部数に関わらず、さほどお金のかかるものではないんです。

どう考えても、道義的にも金銭的にも責任を取れるのは多分印刷の輪転機が回る前だろう。そういうことで東京のお偉方をジャンプしまして社長に直談判しました。「やめてくれ」と。幸いにもわかった人で、「わかった。じゃあ、今回は一号やめろ」という形で、一月二十四日発行号を休刊させていただきました。私の担当上司の取締役がいますけれども、「俺をジャンプして社長に話したのはお前だけだ」と、今になっては笑い話として言っていただけます。

*注　電博／電通と博報堂（広告代理店）の略

角川書店の社員として、『関西ウォーカー』という媒体に関わっていますけれども、個人の思い込みと、サラリーマンとしてやらなければいけないことの間で、非常に悩んだことは事実です。個人的には絶対に間違ったことをしたとは思っていません。ただ、サラリーマンとしては、ちょっとやるべきではないことをやっただろうなと。個人的な誇りと、サラリーマンとしての悔恨みたいなものが、ないまぜになって、ずっと心の中に張り付いたままです。

「頑張ってます」「こう復興します」

一号お休みさせていただいて、次の号から「関西復興リポート」というページをスタートさせました。基本的なスタンスとしては、たとえば阪神電車の人に登場していただいて、状況がどうであった、復興状況がどうである、こういう形で復興していくんだと、そういうスタンスです。震災関連記事には、状況を伝える記事、頑張ろうよという記事、元気ですよといっている記事、いろいろな切り口があると思います。けれども、『関西ウォーカー』という雑誌として、「頑張ってますよ」「こうなっていきますよ」の町の情報とハード情報、雑誌コンセプトの両方が成立する形はどこだろうということで、そういう手法を選びました。

七月、八月と須磨海岸で『関西ウォーカー』がスポンサードして「海の家」をやりました。これも非常に悩みました。話は去年決まっていて、よし今年は須磨で派手にいこうぜという形を考えていて、震災があった。さあ、どうしよう。あまりにノーテンキすぎるんじゃないかという意見が出たことも事実です。その中であえてやらせていただいたんです。その方策として、桑名正博さんが中心になってやっているハートエイド、あれと完全にカップリングした形でなければうちは金は出さん、というスタンスにしました。

うちにも被災に遭った人間がいます。江さんの自宅の周辺ほど辛い思いをした人間は幸いにもいなかったんですけれども、それでも家が潰れてしまった人間、あるいは親類が亡くなった人間もいるわけです。最終的な判断はそいつらを呼んで、「こういう話がある。須磨海岸で海の家だ。ビキニのねえちゃんよんで、現実的にはチャラチャラしたことになってしまう。どうだ。君たちがいやだと言うんだったらやめよう」という話をしました。その時、四人呼んだんですけれども、四人とも「ぜひやりたい。いつまでもしょぼくれかえっていてもしようがない。それはそれとして、前向きにどうやって歩いて

いくかということを模索すべきではないか」という意見でした。それでやらせていただきました。

九五年秋の神戸の特集

何回も神戸に行きまして、もう大丈夫だなと思える地域もあれば、阪急三宮駅の裏あたりへ行くと、まだ、うわーこんな感じなのかというところもあるわけです。今発売されている号で、震災後初めて神戸の特集をやりました。

京都の特集やっても、キタの特集やっても、ミナミの特集やっても、どこでいちばん売れるかっていうと、そこの街がいちばん売れるわけです。ということは、そこに住んでいる人たちにアピールする必要がある。タイトル一つとっても、例えば「京都で遊ぼう」とか、「京都で食べよう」とか、そういうタッチになるわけです。

今回の特集で付けたタイトルが、「神戸へ行こう」です。これだけ元気になって、これだけみんなを待ってる神戸に行こうよと。ただし、現状がどうであるかってこと、駄目なところは駄目なわけで、それはきっちり記事として踏まえた上で、それでも頑張っている神戸へ行こうじゃないか。そういうタイトルを付けて特集をつくった。その特集のトビラの写真は神戸のお店の人たちに出てもらって、逆に読者にアピールをしてもらう、そういう形を取りました。

神戸っていうのは商売上からいっても大票田でありますので、はずすことはない。その中で、震災のことを忘れずに、それでも過去のことになりつつある震災なのかもしれないし、いつまでも心に残る震災なのか、そこらへんを見極めながら、神戸の特集をやっていければなというふうに考えています。

右見開きページ中に掲載された奥村編集長の文。▼

兵庫県南部地震で被害に遭われた方々に
心からお見舞い申し上げます

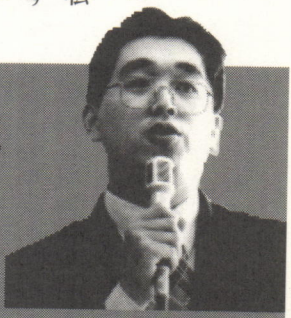
平成七年一月十七日は、とても悲しい日本中・関西人にとって未来永劫忘れられない日となった。

『関西ウォーカー』
1994年10月31日創刊
隔週火曜日発行
発行／（株）角川書店
印刷／凸版印刷（株）

DTPに関する人と情報のネットワーク

ビジネスラインの復興に目を向け活動

富永　順三
（「関西DTP協会」事務局長）



富永　今日のパネラーの方々と私はちょっと立場が違うので、まず最初にDTP協会を説明させていただいて、そのDTP協会がこの震災で何をしたのか、そして今何をしているのかということをお伝えしたいと思うんです。

DTPという言葉はどこかで聞かれたことがあると思います。直訳しますと机上出版、卓上出版、パーソナルコンピュータを使って編集作業をする、出版物をつくるというものです。DTPという言葉ができて今年でちょうど十年、日本に入ってきたのが六年前です。日本語の文字が出るようになったのが六年前ですので、まだ歴史の浅いものです。出版業界を含め印刷業界、デザイン業界、放送、あらゆる面において、技術革新ということで、今DTPが浸透してきています。

実際はいろいろ問題があるわけです。色が出ない、文字がうまく出ない、フォントが少ない、文字詰めが悪い、いろんな問題があるわけなんですね。それを共に話し合う場がない。技術を教えてくれるところがどこかわからん。これからどうなっていくのか考えていくところがない。

それで、二年前の四月に、そういうことを共に話し合う場をつくっていったらどうだろうかと話し合いが始まりました。こういう文化を育てていかなあかんから、公の団体にしないといけないという話が出ました。その年の十月に、関西DTP協会の設立記念総会をやらせていただきました。

広報やセミナーを通じてDTPの啓蒙・啓発活動をやっております。一方通行になりがちなセミナーだけでなく、交流の場をつくろうと、月に一回DTPサロンという簡単な交流の場をつくったりしております。

DTPはこれからの世代の人たちのものであると、95年の五月に学生部を発足しました。こちらから何々をやってくれというのではなく、学生にすべて主導権をわたしまして、セミナーやイベントを学

生が企画して、こちらは後方支援という形で活動しております。

平たくいうと、DTPに関する人と情報のネットワークをつくるというのがモットーで、そういう活動をしているわけです。

そのDTP協会が、この震災で何をしたかということですが、私も豊中の家で、今思いだしても身震いがするくらい恐怖を感じました。電車が止まったので、バイクを飛ばして事務所に行きました。事務局の中はむちゃくちゃな状態だったんです。うちの会長と副会長が、芦屋の高層マンションと神戸の元町にいる。電話連絡を取ったんですが全然つながらない。

この時にDTP協会として何をすべきか。

食料の運搬やボランティア的な活動も、非営利団体（NPO）ですから考えたのですが、協会としては何を目指していくべきかと考えました。連絡の取れる役員と協議しまして、一月一八日に〈阪神大震災被災者支援委員会〉をつくり、協会としては、ビジネスラインの復興に目を向けていこうということで活動し始めました。求人支援、業務委託支援、業務代行支援、設備提供支援、技術サポート等の支援をします、と。

ただ、そういうことをいっても仕事どころではない状況ですので、まずは全国の方々に向けて、こういうことをDTP協会がやりますと、新聞また雑誌等で発信しました。かなりの件数でいろんな方から反響をいただきました。自分の使っている事務所のマッキントッシュを全部寄贈しますとか、お金を送ってくれたり、こちらまで駆けつけてくれたりですね。そういう情報をすべてストックしました。

二月に入ってしばらくしてから、今度は被災者の方に対し、新聞、パソコン通信のネットワークを通じて情報を出しました。支援ポスターを各地に貼りまして、困っている方があったら遠慮なく申し出てくださいと活動し始めました。

トータルで二五〇件ぐらいの応募がありました。仕事場を紹介させていただいたり、また機器の支援、コンピュータが潰れたから送ってくれとか、昼間は車が通れなかったので、夜中に持って行ったり、地道な支援をさせていただきました。

その中で、ボランティア団体の方々の、ミニコミ、また情報誌を発行するのにこういうものを使いたいという声が少しずつ多くなってきました。クチコミで広がっていったんです。そういうところにDTPの機器を持ち込んで技術的な支援をする。小学校や公民館に持ち込んでやらせていただいています。

復興支援の貸しオフィス

被災者の状況が少しずつ見えてくるようになりました。全壊した、半壊した、事務所がない。事務所が助かったところは幸いやったと思うんです。壊れたところは自分の家もたいへんな状況で、事務所を建て直す費用もない。人を辞めさせないといけない。そういう悲惨な状況がたくさんあったわけなんです。

そういった人たちは、皆さん大阪に出てこられて、知り合いのデザイン事務所や出版社、印刷屋さん、いろんなところに机を置かしてもらって仕事をやる。

その中で出てくる声は、自分たちが気楽に使えるオフィスがほしいということです。きっちりした人だったらコピー一枚とるのも、「すいません、コピーとらしてもらっていいですか」と、そういう肩身の狭い思いしながら仕事をやっている。自分たちのオフィス、自由に使える設備が欲しいという、だんだんそういう声が大きくなってきました。

DTP協会として第二段階は、自由に使える借りオフィスみたいなものをつくろうやないかという話がでてきました。メーカーさんとか支援してくださる方から機材を提供してもらって置いて、自由に使ってもらおうやないかと。

最初、ATCが貸しますよっていわれたんですけれど、場所の問題と条件が合わない。あきらめようかなとなった時に、兵庫県にうちのプロジェクトの話を持ち込みました。

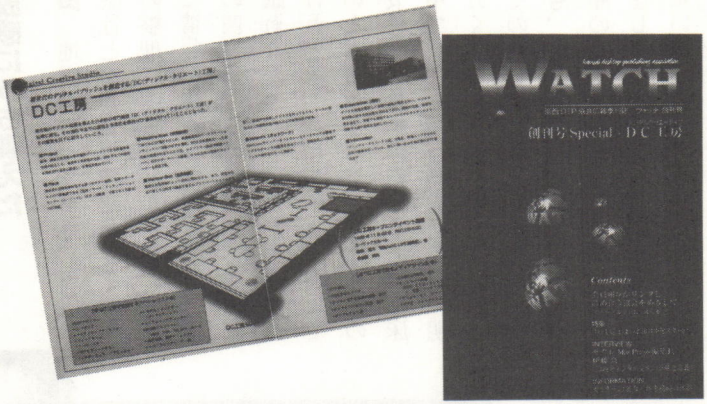
全然当てにしていなかったんですが、五月に通産省が予算を付けてくれまして、復興対策プロジェクトということで、〈ディジタル・クリエート工房〉が、十一月二二日にできました。

DTPはパーソナルな情報を発信するには非常に有益な手段、道具なんです。しかし使いこなせない方が非常に多い。私たちが技術指導したんですが、覚えるのはなかなかたいへんだ。そういうものを自由に使える場所、これから情報を発信していく人たちが自由に使える場所がほしいという声があった。それでディジタル・クリエート工房ができました。

情報の整理は編集者の仕事

パソコン通信は非常に有益な情報発信の手段といわれていたんですが、実際はほとんど情報の垂れ流しで、どこにどういう情報が入っているかわからない。いちいち読まないといけない。すぐ膨大な量になる。そういう時にDTP協会としてはあまりなにもできなかった。

私たちは編集者の方々に情報を整理する仕事を期待しております。非常事態において情報を整理し、自分たちで発信していくことができる人たちが、もっと育っていただきたいと思います。



関西DTP協会は、ディジタル・パブリッシング研究の普及・促進を目的とした日本初の団体。

会員は出版・放送・デザイン・印刷業界からフリーの個人まで、マルチメディア時代に対応すべく幅広く、その活動は「人と情報のネットワークをつくる」をキーワードに、DTPやインターネットなどの最新情報セミナー、経営者対象の研究会、初心者対象の勉強会、会員同士の交流会、年に1度のシンポジウムなどを積極的に展開している。

昨年は阪神大震災の支援活動が認められ、協会が企画した「ディジタル・クリエート工房」が通産省と兵庫県の全面支援のもとに創設された。

工房には、DTP・マルチメディア・インターネットの機材が自由に使える環境があり、ここもまた新しい人との情報の接点にしたいと日々奮闘中である。

DC工房創立のきっかけを作ったのは、「震災で仕事を失った人々のためにネットワーク上で仕事を作り、流通させよう」と提案した、震災レポートだったという。発信者は、兵庫県芦屋市で自らも被災した、森川眞行氏。震災当時は関西DTP協会の会長を務めていた人だ。『JPCDOC』Vol.9（発行／JPC会報編集委員会）には、DC工房開設に至るいきさつを始め、関西のディジタル・パブリッシャーの動向が森川氏自身の手で活写されている。

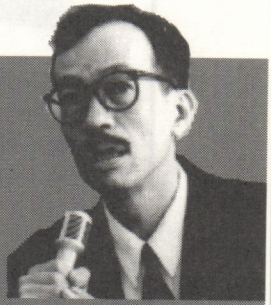
（森川氏のホームページは、http://www.pineapple.co.jp/Silicon Cafe/Homehtml）

解放感にうち震えた

西田　地震があってから、周辺とか会社とかの安否確認と、そのへんの整理に四日ほどかかり、主だった情報を得ることができました。その四日目、その晩にすごく疲れて眠れなかった。眠たかったんですけれども、急にこのまま戻っていいんだろうかみたいな、一種の不安感、恐怖感みたいなものが床の中で出てきて、結局その日、明け方くらいまで眠れなかった。

その四日間は会社でも身の回りでも、壊れた壁を少し直すとか、部屋の中の本を元へ戻すということをしていて、この戻す行為がいったいなんだろうかなと。今、〈戻す〉ってことを真剣に考えないと、極端にいうとぼくの何年かの人生が、この戻し方にかかっているんではないかみたいな問いかけが、説明できないような状態で出てきました。

五日目くらいですか、友達に安否確認の電話をしたんですけれども、彼は、あれ以来解放感にうち震えているというわけです。一瞬ぼくもビクッとしたんです。困っている方もいるし、悲しまれている方もいる中で、解放感に震えている方もいる。実はぼくも心の中で浮き上がっているものはなにかなといったら、ぼく自身が解放感で震えている。こういうことは地震当初は、なかなか口では言えませんでした、不謹慎だと。ぼくの奥から突き上げてきているものを、やっぱ、なんらかの形にせなあかんだろうなと思いました。



西田　次郎
（『リ・セット神戸』編集長）

自分たちからの発信で　復旧と新たなる人間社会の復興のための冊子を

被災地で被災者が発信した本

印刷会社に勤めています。マッキントッシュを使ってチラシとかパンフレットとかを製作している職場だったんです。そういう機器を使って、形につくるのはできるだろう。それまで本つくりにはほとんど縁がなくて、出版のことも何も知りません。けれども、とにかく何かつくりたい。手元にあったのがマックという機械で、それを早く動かして、自分らの思っていること感じていることを、とにかくなんらかのものにしたい。

その時は雑誌になるのか、本になるのか、チラシになるのか、デイリーニュースになるのか、全くわからんままで、とにかく自分らがつくれる範囲でつくっていこうと。最初はガスも水道もないんで、作業はなかなかできなかったんですけれども、どういうものをつくろうかなという、コンセプトづくりをしようと考えました。

第一号の表紙の裏に書かせていただいたんですけども、情報誌という気は全然なかったんです。この本が最初マスコミに取り上げられたのは毎日新聞の『希望新聞』なんですけれども、その時は「被災地でタウン誌発行」ということなんです。ぼくらの意識の中には、情報誌であるとかタウン誌であるとかいう意識は一切なかったです。どちらかといえば、本という意識でつくろう、つくりたい。自分からの発信で、本という形でつくりたかった。

一回こっきりで出して、はい終わりですという形ではとうてい済まないなというのはありました。定期的に二カ月に一回くらいは出せるかな、一年間頑張ろうと。六号まで出してそれでひと区切りつけて、それからまた先のことはその段階で考えましょう。その予定で進めたんですけれども、本来十月末で第五号が出ていなければならないはずなんですけれども、今三週間ぐらいずれ込んで、編集もなかなか進んでいない。多分一カ月くらい遅れちゃう。だから、第六号が出るのは、多分一周年の一月ぐらいになってしまうのかなと思うんです。

最初にこの本をつくるときに、なんでもかんでも載せていいものか、どういうことを優先して載せないかんのかということを考えました。スタッフは社内の四人くらいで始めたんです。あの時分は一種のかなり暗い気持ちで、オーバーにいえば全てを失ったなという形の声が周囲に多かったんです。たしかに失ったものもあるんだけれど、全てを失ったわけではない。そういう後向きでなしに、生き残っている、残っているものとか、戻すってことに興奮を感じているものとかもある。行政批判、いろんな批判がいっぱいあったんですが、それ言い出すとキリがない。行政非難と責任のなすり合い、そういうことはこの本には載せない。

暮らしのリセットをどうしていくか

もう一つは被災地と被災者という言葉も使わない。被災者と被災地ということは、マスコミさんが最初どんどん使われたんです。

『リ・セット神戸』、神戸と使うことも抵抗があったんです、正直な話。被害地域は神戸だけではな

く阪神間や淡路もある。リセット阪神にしようか、リセット関西にしようか、いろいろあったんですけども、ぼく自身は『リ・セット神戸』でいきたい。もちろん〈神戸〉の中には他の地域の人も含まれますし、一つの固有名詞ではなしに、シンボルとして使っていきたいということで、あえて神戸を前面に出しました。

〈リセット〉、どういうふうにリセットしていくか。DTPでは、それまで作業していたメモリー上のデータは、電源が切れたり、トラブルが起こった瞬間にはどうしようもなくなって、リセットボタンを押すわけです。完全な原型復帰ができなくて、本体にあるメモリまで引っ張り出すしかないんです。ぼくらの生活もそうですし、いろんな形の原型復帰が考えられるだろう。その足取り一歩一歩がこの本で表れればいいなということです。

一号、二号、三号くらいまで非常に元気でやってたんですけれども、今非常に落ち込んで、あのころのパワーがなくて、この苦しさみたいなのが、一つの答えになるかなと、最近、感じています。だから、頑張って六号まで出るとは思いますけれども、今日のシンポジウムのテーマにあるような「明日を語る」というような明るい感じではなく、かなり重苦しい形で抱えていかなあかんなあということです。

あんまり出版業界そのものも知りませんし、そういうことではお話できませんが、地震からこの本になった経緯をお話しました。

リセット神戸　創刊号

■創刊号／一万冊制作

文字通りの「火事場のクソ力」。何も無いところから、何でもよいから可か生み出したい。そんな一念だけの産物。

一体どれほど印刷すればいいのか全く分からず、とりあえずは区切りのよい一万になった。もしかして増刷になるかも、というかすかな希望もあったし、百部も売れないかもという暗い気分もあった。

一万冊は凄い嵩だと分かったのは、製本できた本を運ぶ時だった。四畳半の部屋をほぼ占領する量。神戸で四畳半のスペースがどれだけ貴重なものか！　メンバーで手分けして保管しているが、そろそろ処分しなくては。雑誌というものが、作ることより、配本することにどれだけエネルギーが必要なのかも痛感した。六千冊残った。

■第二号／四千冊

創刊号実売三五〇〇冊を考慮して四〇〇〇の印刷。三〇

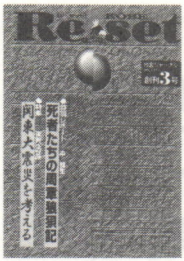
2号

意見もあったが、現在、二六〇〇冊でている。（うち五〇〇程度は返本）定期購読者が百二〇～三〇名（二〇〇冊程）。

この頃、編集に関しての環境は整ってきていた。創刊号でできなかったこと、書けなかった言えなかったこと、そんなことも紙面の上でいろいろと展開できるようになってきたように思えたのだが…。

この頃すでに地震の体験の共有感にヒビが入り始めていた時期だとも思われる。

■第三号／三千冊発行



3号

ほぼ、定期購読の数も落ちつき、編集も取材や情報やということより、より僕たちの心の軌跡を記録する方向へと定まってきた。同時にあの苦境から、自分たちの立っている場所の確認という「リ・セ

は終えたような気がする。

復興とは新たなる再生であるべき、という多くの人が抱いた願いが、少しずつ少しずつ現状復帰の波の中で、自覚の内と外から失意しはじめた頃だろうか。それは雪崩の端緒のように小さな亀裂が自分の中で広がっていく時期だったと思う。

■第四号／二五〇〇冊発行

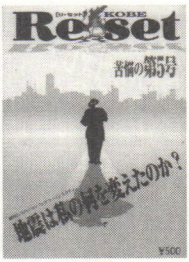
前受の定期購読からの資金もなくなり、資金的に辛い状態に入り出した。そのことよりも、内的な発行への意欲が薄らいできたことが辛い。

外部からの投稿も減り、僕たちの視線も復興の大きなうねりの中で見るべきモノを見失いがちになった。凄まじい都市の、社会の再生力に、結局は自らの生活を委ねなくてはいけないのかと、一種の敗

4号

た。

■第五号／一七〇〇冊発行



5号

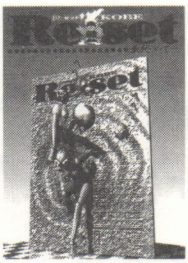
この号で、隔月発行の予定が大きくズレた。二ヵ月遅れの発行は苦渋の作業だった。

目に見えない大きな発行へのプレッシャーと、一体何を書いて、何を伝えればよいのか…。ギリギリ年内発行をしたものの、果たしてこれが発行物としての価値があるものか、全く自信のないものであった。そんな五号であったが、そのあらわな告白に少なからず反響があった。

同じような辛さを抱えた人々の多さに心が波打った。取り残された者同士の情けない連帯感のようだが、最終号へのかすかな意欲をとぎれさせないものだった。

■第六号／一五〇〇冊発行予定

最終の「ネバーカンバックツーイエスタディ」を残して、校了になっている。私の原稿ができしだい印刷にかかれる状態が、二ヵ月続いている。書くことも決まっている。書かなくてはいけないことも充分痛感している。でも、最後の合図が送れない。離陸のためか着陸のためなのか、どちらにしても腕を振りかざして、大きく回すことに必要な何かが欠落している。



6号

おそらくその有り様のままで「リ・セット」は終わってしまうことは間違いなさそうである。そして、リ・「リ・セット」の第一歩が始まるのだろうと思う。

発行責任者　西田　次郎

symposium

パート

2

の明日を語る

MEDI

MAGAZINE

NETWORK

地域情報誌

COMMUNICATION

池田＝それでは、まず会場からの質問に答えていただきます。

小泉さんに。「震災でスポンサーが減ったと思いますけれども、地震以後の営業の様子がうかがえれば」と質問が来ています。

小泉＝スポンサーが減ったのはたしかです。たとえばモロゾフでさえ、バレンタインデーの時は（広告が）出なかったんです。ところが三ヵ月後に行ったら、「（震災で）十億ぐらいやられたけれど、これくらい（の広告費）やったらなんとか出すわ」と。私らにとったら十億なんて目を剥くようなお金ですが、それでも広告費をくれはる。

《神戸祭》が中止になったんですけれど、南京町がすごく元気で、《神戸五月祭》をやろう、小泉さんサンバ踊ってと言ってくれたんです。官がやらないなら民でやってやろうと、みんなものすごく頑張ったんです。インターナショナルな南京町の人たち、華僑の人たちのパワー、これはすごくいい勉強になりました。元町の人たちは、どっちかというと引きずられておりました。そういう中で一緒にやったんですね。うちはそのお祭りに引っかけてスポンサーを集めるわけです。

北野町界隈も元気だった。岩盤で、割合（地震に）強かったもんですから。異人館はやられていて、『異人館復興基金』というのをやりだした。《北野復興祭》をやるというので、うちもプログラムを立てました。伍芳さんのお琴の演奏と罹清水さんの中国の歌のディナーショーです。とってもすてきな方が集まってくださった。それから北野クラブでファッションショーもいたしました。きれいなものを見たい、いい音楽を聞きたい、そういう時だったんですね。伍芳さんのお姉さんはインターナショナルで頑張ってらっしゃったんですけれども、震災で亡くなられました。それで偲ぶ会をやったんです。そういう催しをボランティアでやって、参加した方の中でスポンサーを集めていく。

《神戸ハイカラ博》もやりました。これは笹川財団が五十億もお金を出してくれはりました。

お祭りというのは元気が出ましたですねえ。祭りをやって、その地域の人たちから、一軒五万円を集める、名刺広告を三万円で集める。こういうちっちゃな力で大きなパワーにしていく。そして必ず、「元気でやってます」、「オープンします」と。十一月になってオープンするところがまだまだたくさんございます。そこへ顔を出し、広告をもらうということにいたしております。「全員並んでよ、にこにこ笑ってよ」と、そういうことを言いまして、お祭りとともに元気をつけて頑張っていく。

震災をおもしろがる

考えてみれば、震災なんて一生に一回のことですから、いい体験したなと思っております。ファッションショーをやったときも田辺聖子先生が応援に来てくださいました。明るくおしゃれに震災を乗り切ろうということで、私どもは頑張っております。ちっちゃくたくさん集める。足がだるくなるほど歩いております。神戸は坂の街でたいへんなんです。足で稼ぐ、これっきゃないという感じです。そしてアイデアですね。どんないい企画を立てていくかということです。

今、《トアロード復興》という活動をやっています。商店街が三つあるんですが、それを統合して〈まちづくり協議会〉をつくろう。まん中が元気になれば、周辺のトアウエストとかトアイーストとかも寄ってくる。《トアロード復興祭》を来年（'96年）三月くらいにやってみたい。

元町も〈レンガ復興プロジェクト〉をやっており

ます。三千円でレンガを買ってサインしてもらって元町通りに敷く。その界隈にスポンサーになっていただく。町のためですから、二万円でも三万円でも出してくださるわけですね。その貴重なお金で私たちはやっております。

民間のちっちゃなところを応援してほしい

池田＝もうひとつの質問です。「近県の者として、神戸の方たちにこれから個人的なお手伝いをするには、どのようなことをすれば、お互いの負担なく喜び合えるか、教えてください」。近県の人たちが神戸の人たちに対してこれからどう関わっていったらいいのかについて、アドバイスしてください。

小泉＝主婦の方には、義援金を集めたら「あしながの基金」にぜひ送ってほしい。そういうちっちゃなことから応援していったほうがいいんです。（義援金が）赤十字に行くとみんなの方にこないんですね。これが全く問題です。

もう一つ、〈ピーターパン子ども基金〉があるんです。ピーターパンのバスをつくって被災地を回ろうということをやっているんです。子どもたちをキャンプに連れて行こうとか。これもとってもいま頑張っている。

そういう、民間でやっているものを応援していただくのがいいんじゃないかと思っております。

生活関連情報から元気情報へ

池田＝奥村さんには二つ質問がきています。「『J・one』、『フロムA』では、震災後しばらくボランティア募集や生活関連の情報を扱っていましたけれども、『関西ウォーカー』ではこれらの情報に対してどういう対応を取ったのでしょうか。そしてその理由を教えてください」。

もう一つは、「中止された次の号の編集方針・内容を具体的にお話しください」。

奥村＝一号休刊して、次の号からしばらくは、ボランティア募集及び生活関連といった情報も〈関西復興レポート〉という欄に掲載していました。ある時期から、関西がこう復興してますよ、という情報に切り替えた。それは編集部の判断としか申し上げづ

らいことなんです。当初は、人手がないとか、あるいはとにかくお手伝いしたいんだという手紙も入ってくる中で、そういう情報も載せました。

時間が経つにつれてやはり状況は変わってくる。最初はえらいことになっちゃった、なんとかせねばならないという情報もフォローしなければいけない。しかし、時間が経つにつれて、「関西が、あるいは神戸がこれだけ復興しつつありますよ。元気だから行きましょう」と。そういった形を送るのが『関西ウォーカー』の基本コンセプトですので、タイミングを見ながら自然にスライドしていったということです。特にそれ以上の他意はないです。

休刊の次の号のコンセプトを悩んだ

休刊の次の号ですが、特集「お好み焼き」をそのまま載せました。ただし、神戸のお店が予想通りほとんど連絡が取れませんでした。兵庫県内のものは、連絡が取れたところも含めて、事前にお電話を差し上げて、今回は見合わせていただきますと。京都と大阪を中心としたお好み焼き屋のお店を入れたということです。巻頭の見開きでお見舞いの記事も入れているんですけれども、その趣旨は今申しあげたようなことです。

同時に非常に悩むのが、じゃ一号休めばそれで済んだのかというところなんですね。これはさきほど申し上げたサラリーマンだからという部分も当然からむんです。『関西ウォーカー』は二府四県で発売されてまして、兵庫県が占めるシェアは全体の十五%から二十%です。残りの八十五%は兵庫県以外で売れている雑誌です。

東京からみたら対岸の火事だということを申し上げましたけれども、神戸で震災を受けた方からすれば、大阪で生活して、大阪で仕事している人間の言う意見は、やはり対岸の火事だろう。そういう意味では、滋賀県、奈良県、大阪府、京都府の読者に向けて、しばらくは「喪に服す」といったらあまりな言い方かもしれませんが、『関西ウォーカー』らしくないけれども、『関西ウォーカー』なんだよねってものをつくるべきなのか、非常に悩みました。

いろいろ考えたんですが、それはしませんでした。最低限の気を遣った上で、やはり『関西ウォ

ーカー』そのものを出すべきだろうと。これは私の個人的判断です。

休刊の次の号は、震災で営業ができなかった神戸エリアの書店さんには配本できない。これをマイナスした形で発売しました。ですから三十五万とか、そのくらいの部数だったと思うんです。けれども、返品率はほとんど変わらなかったことも事実です。

その行動に対して、「おまえ、この非常時になにを考えているんだ」といった意見が全くなかったとはいいませんけれども、我々が採った方法論が正しかったという形での、読者からの反応をいただいたのも事実です。

誌面を買ってイベントをする

池田＝続いて江さんにお聞きします。「被災者を励ますという上からの立場ではなく、読者そのものが主人公になったような誌面づくりに成功したでしょうか。地域情報誌をつくって良かったといえるような成果があったのかどうか。読者の顔や声が聞こえるようなエピソードを聞かせていただきたい。街のおしゃれな情報という枠を越えるような誌面をつくろうとされたなどの試みがあれば教えていただきたい」。

江＝これまでトアウエストとイーストの店の方々を『ミーツ・リージョナル』では数え切れないくらい掲載させていただいてたんです。トアイーストは、行政がどーんと金ぶち込んで都市計画した地区でなくて、自然発生的にできた街です。大阪のアメリカ村もそうですが、街のダイナミズムとして面白いと思うんです。震災後、潰れている店もあったし、なんとかバケツに水汲んできていち早く営業している店もあった。横のつながりってのが誰彼なしにできました。「うちの店だめやけど、一緒になってやらしてくれ」、「いいですよ」というようなことです。みんなと一緒に地図をつくって、それを我々が「被災地からの便り」というページで紹介しました。

八月一日号で神戸特集をした時に、そのトアイーストの方々から、自分たちでお金集めて、『ミーツ・リージョナル』の誌面を買いたいとオファーがありました。お金をいただくというのは、うちの雑

誌としては非常にありがたいけれど、それを抜きにして数ページ割いて、現在進行形で、こういう店はこう考えてこうやっているんだよ、みたいなことをさせていただきました。

チキンジョージさん、神戸唯一のライブハウスが全壊してしまったんですけれど、十二月十八日に再オープンする。クラブイベントといって、一夜限りで倉庫とかを利用して、音楽をかけたり、詩の朗読をしたり、ライブペインティングしたりとか、そういう手法にうちの雑誌はずっと注目していました。今までライブハウスとしてやってきたチキンジョージさんが、それをうちの雑誌でやってくれと。じゃ、クラブイベントしましょうと、「KOBE GOES ON」っていうタイトルでやりました。東京から来たジャズ系ミュージシャンと、神戸で活躍しているDJ、それからライブペインターらが集まって、ノンプロフィットすなわち全然利益なしでやるということを打ち立てましたところ、すごくみんな協力していただきました。

またまたチキンジョージ周辺のトアイーストのお店に協力していただき、彼らの宿泊費と交通費を出していただきました。そのかわりうちの誌面を無償で使ってイベントをやる。ストリートレベルでお金を集めたり、人を呼んだりしてやっていく。そこらへんがエピソードといいますか。

被災者という言葉でひとくくりにされる恐さ

池田＝『リ・セット神戸』の西田さんにはたくさん質問がきております。

「行政批判、責任のなすり合いは一切なし、そして被災者・被災地という言葉を使わなかったのはなぜでしょうか。それをもう少し詳しく話していただけませんか」。

西田＝創刊号を読んでいただければ、そのへんのことは全部書いてあるんですが。

行政批判とか、責任のなすり合いをしないってことは、地震に関して、自分らの反省から始まるってことです。これを機にいろんな形で反省された方が多かったんです。今回起こったことを通して、今までの生活なり生き方なりを見直す時だから、そこで責任転嫁してしまうと、そういうチャンスが無駄になってしまうんじゃないかっていうことがありました。まずは自分の内部に向けて、一・一七とそれま

での生活ががなんだったのかを考えましょうということが大きかったと思います。

テレビとか新聞の報道で被災者がどうのこうのという言葉が氾濫しました。ぼく自身は直接的になんの被害も受けてないんで、ぼく自身が被災者かって聞かれたときに、被災者じゃないって言わざるを得ない。はたして家が倒れた人が被災者なのか、怪我した人が被災者なのか、垣根が壊れた人が被災者なのか。定義付けが何もないままで報道されている。これが妙に気になって、各マスコミにお達しみたいなのを出しました。創刊号を出す前に、創刊準備号をカラーコピーでつくりあげたんですけれども、もうちょっと別の言葉はないのかとマスコミの方たちにお願いする形で。

一人ひとりの体験が被災地・被災者ってことでひとくくりにされて、受け止められるという恐さがあります。ぼくらはぼくらの体験があるし、もっと悲惨な体験もあったし、このことでプラスに転じている体験もあるわけです。そういういろんな体験を、ひとつにくくられて、そういう立場にいればいいんだなあっていうふうに、だんだんなっていくところもあったんですよ。

そういうことではなく、被害に遭われた方という言葉を使おうって、ぼくらの仲間うちだけで言ってたんです。今でこそ、あまり抵抗感はなくなりましたけれども、当時は被災者と言われたり呼ばれたりすることに、ものすごく抵抗感があって、テレビ新聞等を全く見ない時期がありました。

とにかく雑誌の形にこだわった

池田＝続いての質問です。「雑誌発行にあたって出版社と交渉なさったということですけども、その時見つけた問題点について教えてください」。

西田＝ガス、水道、電気すべて駄目で、とりあえず電気だけは表の公衆電話から引っ張り出して、（会社の）機器のチェックを始めたのは、十日くらいたったころです。電信柱から延長コードを何十本もつないで、ビルの三階まで引っ張り上げてきて、マッキントッシュを動かして、これでなんとかつくれるなと。ぽつぽつワープロの文字打ったりとか、忘れたらあかんようなことをメモしておく。写真は使い捨てカメラで撮っていたんですけれども、簡単な入力機があったんで入力して、一応編集みたいな作業に入ったんです。

本を出すってことは具体的には全くイメージがなかった。出版業界に頼めば、世間にどんどん流れていくんだと思っていました。こういう時期やから、こういう本出せばきっと売れるだろうみたいなへんな期待と、こんなもんつくっても五十部も売れへんなという絶望感と、揺れ動きながらつくっていたんです。

神戸で一軒、一人で頑張られている出版社があって、紹介されて話を聞きにいきました。とにかく雑誌にしたいって言った時に、やめなさいって最初はっきり言われたんです。ある程度まとまって単行本で出されるんでしたら協力しましょうと。雑誌という形になれば、あなたのつくりたいようなものは絶対できませんよって言われた。その時はなんでかなあと思ったんです。発行日がきっちりしなければならないとか、発行部数も決めなあかんとか、経費も限定されるとか、そういうことをクリアしないと雑誌コードはもらえませんよ。それがないと一般の配本ルートで本が動く形にはなりませんよと。雑誌コードというのも、ぼくらはよく知らなくて、そんなものがいるのかなと。

でも雑誌という形にちょっとこだわって、定期的に出していきたい。そしたら直販しかないなということで、自分らで担いで本屋さんを回るという形です。しんどいですよって言われたんですけれど、それやりますと、現在も直販という形でやらしてもらってます。

地震前のぼくに戻ってしまった

池田＝今、落ち込んでいると言われました。よろしければそのあたりをうかがいたい。今後の出版計画もお聞かせください。

西田＝ぼく自身、創刊号とか二号のころと、全く別人やという感想があるんですね。そのころの自分と現在の自分は全く違う人間です。だから、代弁するっていう形になるんですけれども、五月の連休あたりで一つの区切りがあって、この秋くらいで、精神的にはほとんど震災前の状況に戻っていると思うんです。だから、自分自身が思ったよりも早く、前のぼくに戻ってしまった。身内では、もう地震が終わったやろ、という話をしているんです。

この本自体が、ぼく自身のパワーで出しているものではなく、こういう場がありますからなにか利用される方は投稿くださいという、基本的に投稿雑誌です。取材をしようか、しよまいかという時期があったんですけれど、取材は一切しない。取材をすると、言いたいことがどこかで歪む危険性がある。純粋に投稿誌という形でしていこうと。

投稿される方も当然どんどん元へ戻られて、皆さん書く気がない。そういう形で原稿量も落ちています。ぼく自身、この十カ月くらいを今どうまとめていいのか、どういう形になっているのか、プレッシャーと責任感と、いろいろ混じって、やらなくちゃならないんだけども、実際は動いていないジレンマの中で、ちょっと今はっきりいってウツです。

池田＝一応これは六号で終わりですか。

西田＝できたら今すぐでも終わりにすると言いたい(笑)。なんとか頑張って六号まで。

工房でビジネス支援

池田＝では続いて富永さんに。「現在被災地では各自治体単位でまちづくり協議会がつくられています。住民にその情報を伝えるべく、まちづくりニュースを自らの本業の復旧もままならない中で発行されている人たちが大勢おられますけれども、その人たちへの支援を行っておられるのかどうかを教えてください」。

富永＝うちの協会としては支援は行ってません。というか、ほんとうに申し訳ない話なんですが、一部の方にしか私たちのやっている〈震災復興プロジェクト〉をお伝えできなかったということです。それをお詫びしたい。

それと、うちは協会としてやっていますが、みなボランティアなんですね。アミさんと同じようにNPOで、専従が私とアルバイト一人。あとは全部会社員です。無給で、しかも自分で身銭を切って被災地に行って、復興支援を手伝っていただいているということで、どうしても限界があるということをお許しいただきたい。

もう一つ。冒頭に申しましたように、うちがやろうとしていたことは、ビジネスラインの復旧ということです。なにを優先順位にするかというときに、被災されている方々の仕事の復旧をお助けするとい

うのを最優先とさせていただきました。震災活動記録室というのが、神戸にあるんですね。そこにはコンピュータ等を支援させていただいたり、うちの方からボランティアが行ったりもしています。現在もそういう活動はしておりますが、最優先はビジネスラインの復旧を目的としています。

五月、六月くらいからは、さきほど言いましたように、その人たちの自立を助けようということで、いまつくっておりますDC工房、これを今後そういう方々に自由に使っていただいて、新しい産業や仕事に役立てていただきたいというのがうちの協会の願いです。

一月十七日はあくまでもニュースとして扱う

池田＝奥村さんたちへの質問がもう一つあります。「震災後初めての正月を迎えますけれども、来年早々の特集はどういったものにする予定でしょうか。震災を受けた人たちのことを考えておられるのか、それとももうそういうことは早く抜けたいということなのか」。

奥村＝アイタタって感じがしているんですけどね(笑)。うちは一月の十日売りが去年(95年)の十七日をカバーするものになっています。基本的に考えているのは、特集のページの前に「ニュースウォーカー」というページがありまして、町の話題が大集合しているページなんですけれども、そこでなんらかのことは当然やらなければいけないだろうと考えています。

今回神戸の特集をさせていただいて、震災時にからむ段階で止むを得ず落としてしまったお店等々、すべて改めて連絡した上で、移転しているなら移転している、新規で営業されているならされている、そのまま元気なら元気ということを、きっちりとした形でやらせていただいています。あくまでもニュースとして、一年たった一月十七日を考えるというページは当然つくります。

「ニュースなまち話」で神戸を報道

江＝特集は八月一日売りの九月号で「九五年神戸・夏」ということでやりました。来年からの特集内容なんですけれども、神戸の特集はいつやるか、まだ未定です。

『ミーツ・リージョナル』をずっと見ていただいているとわかるんですけれども、what's goes on! というページ、今まちがどう動いているかという、そのページで神戸の人間はどうしているか、そのへんはずっと載せておりますし、密着して取材もしております。

それと十二月一日売りから、「ニュースな街話」ということで、京都の木屋町、河原町の話、大阪のミナミ、キタの話、神戸の街の中心の話、そのへんのことを載せるページをつくりまして、地震についてどうだということも出てくるということを考えております。

ナマズ絵になって心を癒したい

小泉＝十二月号のテーマはジャズと映画です。NHKさんがジャズストリートを取り上げられて、それで観光客が戻ってきて、北野町を人が歩くようになりました。夏くらいからぼちぼち人が来はじめて、よかったなと思っております。

二月号はいつも酒とバレンタインと結婚特集なんです。何で神戸に人を呼ぶか考えたとき、我々女性の目からみて、ブライダルではないかと思っているんです。来年の二月第二日曜日にブライダルフェアをやる。ブライダルストリートというか、街の教会はみんな潰れておりますので、ホテルの教会になるんですけれど、それぞれのホテルで催しをしていただく。神戸で結婚式を挙げる人たちに、二人で名前を刻んだレンガをつくるとか、なんかそんなことをできないかなと、今そのアイデアを具体化しようと思っております。

新年号は震災から一年目なので、「神戸をつくる」というテーマで、この一年間頑張ってきた人たちを何人か出していきたいと思っております。神戸文学賞という賞を出しておりまして、作家が誕生しています。それをバックアップしていこう。そういう新しい人たちを育てたい。

実は一月十八日に神戸文学賞の受賞式をすることになっていたら、大震災に遭いました。出席者の中で亡くなった方もあったり、たいへんだったんです。

もう一つ、二月に「神戸っ子音楽祭」っていうのを企画していたんです。《まちと音楽と愛》をテーマに企画していたもんですから、それもできれば載せていきたいと思っております。勇気の出る歌とか音楽とか、それとまちとをつなげていきたい。

関西エリアの人から、神戸ではどキザに『愛』と言うといわれますが、広島が平和なら、神戸は愛を売っていきたい。神戸では今、人間愛が輝いている時だと思いますので、編集の中にも入れていきたい。

来年三十五周年で、私も還暦なんです。長いことやってきましたので、小磯先生の表紙絵展を阪急ミュージアムでやりたい。神戸の人の肖像をたくさん書いていただいたので、人とまちとがつながっているのがあるんですね。そういうのを、文章も入れた展覧会ができたらなと思うんです。

今は震災からマグニチュードのパワーをもらった気がしているんです。ぱっと発想がわきやすくなった。こないしたらいいなとひらめくというか、神戸の人はみんなそんなことを言っているんです。なんかうまいこといくかなあとか、こうしたらどうかなあというのが出るんですよね。そこが面白い。

江戸の地震の時、ナマズ絵というのがとても流行ったそうです。そのナマズ絵が庶民の心を癒したというんですね。神戸新聞の方が言ってらっしゃったんです。そのナマズ絵に、私たちはならないといけない。心を癒すものになっていかなければいけないと思っております。

地震は神戸・私をどう変えたか

池田＝ではもう一度西田さんに。「来年もし六号が出るとすれば、どういう形のものを出していきたいのか」。

西田＝予定としては、六号で特集することは随分前から決まっていたんです。重たい気分ですけど、「地震は神戸をどう変えたか」ってことです。神戸＝自分という形で、一年くらい経っていろんな形で元へ戻られたと思うんですけれど、このことでどう変わったか、それぞれが再チェックをしてほしい。原稿を募集しているんですけれど、あまり集まっていません。

被災者という言葉の捉え方

池田＝マイクを会場にわたしてみようと思います。発言をお願いします。

発言者A＝『リセット神戸』の方が、被災者とか、被災地とひとくくりにされて使われるのはいやだと言われて、他の言い方を使われていると。それを他の編集者の方々はどういうふうに思われるのか、うかがいたい。

小泉＝私は被災者で、被災地なので、あんまり考えもなく使っております。すみません。（笑）

奥村＝被災者とか被災地という言葉が、結局一人歩きしたから、その言葉を使いたくないとぼくは解釈させていただいたんです。

外側から見れば十把ひとからげ、みんな被災地だし、被災者なわけだし、そういう意味ではぼくも被災者だったりするわけなんですけれども、内から上がってくる形でなにかを表現されようというときに、当然そこにもいろいろな方々がいらっしゃるわけだし、そこらへんを描き分けることが、雑誌のひとつの編集コンセプトであるんだろう。世間に流布されているような言葉では、もはや『リ・セット神戸』のコンセプトは語れないんだろうと解釈しました。

被害に遭われた方ということになるんか、復興に向けて頑張っている方々ということになるのかということは、西田さんの判断でよろしいんじゃないでしょうか。

発言者A＝ご自身の『関西ウォーカー』ではどうでしたかというのを聞きたいんです。

奥村＝ごめんなさい。一つのものとして考えていましたというのが正直なところです。西田さんからそういう意見がでてくると、東京に対してぼくは被災者づらをしていますけども、やっぱりまだ認識が甘いんだよな、ということも正直思います。

現場、被災地、被災者という形で、誌面をつくっている時はずっとやっていました。たしかに今後やっていく時には、考えなければいけないなと思います。

まちの多様性をみつけていく地域情報誌

発言者B＝リストラとか、そういう時代で広告もとりにくいと思います。まして神戸方面は地震の関係で、広告とか、支援を受けづらくなると思います。存亡をかけて、実際どういう形

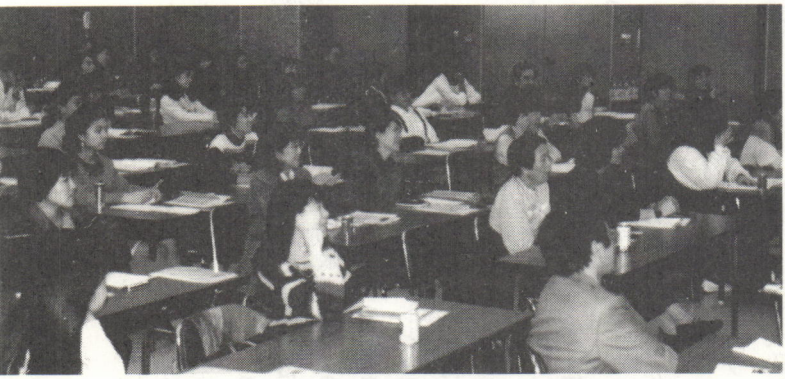
で地域情報誌として残っていこうと、未来のビジョンをもっているのか、それぞれの方におうかがいできればと思います。

江＝現実的にはたしかに広告は減ったんです。二、三、四月はほとんど神戸に配本できないという状態で、販売は落ちました。今は去年と照らしあわせて、ほぼ戻ったということです。

地域情報誌のビジョンのことなんですけど、我々はそんなたいそうなことを考えてません。大阪は大阪の面白さがあるし、神戸は神戸の面白さがある。京都は京都の面白さがある。そういう違いと人の多様性、街々の多様性がある。多様性を見つけていくというところが、街で遊ぶ醍醐味かなと、そのへんで雑誌をつくってますんで、あまりたいそうなこと考えてないんです。

まちにある時代の気分を伝える

池田＝人材の流出というか、ソフトの面の基盤が弱くなっているんではないかという話があります。特にそういうことはありませんでしょうか。



江＝仕事が少ないから人が育たないというのは、我々ずっと関西におりまして痛感することなんです。東京に比べると仕事を与えられる場がない。ギャラが安いとか、いろんな問題があって、東京に雑誌等が一極集中しているわけです。それでも我々はこちらでやる意味といいますか、意義がある。やっぱり街が好きですから、街を生活の場、あるいは遊びの場として、気持ちとか、なにものでもない時代の気分とか、そのあたりを反映できて、それを同じ街に住む人間に買っていただく。そこらへんをすごく意味のある仕事やと考えています。

地域感覚の違う本社との闘い

発言者C＝一つ目は奥村さんにお答えいただきたいんです。

私は主婦で、原稿でお金をもらっているライターでもあるんです。なおかつ、大手スーパーの薬剤師をしているんです。

神戸で被害を受けた、私の勤め先は、被害を穴埋めするために各店舗の人員をすごく削減していて、信じられないことがいっぱい起こっていて、店内には人がいない状態です。お客さんはどこに何が売っているかわからないから、店員を見つけたら薬剤師であろうと、「りんご、どこで売っているんですか」と聞いてくるような状態です。人員削減は現場を見たことがない東京本部の人が全部やっている。現場はそれに関して本部に文句は絶対言えないし、ただ本部に振り回されているというのが現状なんです。

情報誌の場合、『月刊　神戸っ子』とか、『リ・セット神戸』みたいに、地域にあって地域の情報を発信しているものと、全然違う場所にあって地域の情報を発信していく『関西ウォーカー』の角川さんと、なにか違いがあるのか。小泉さんの気持ちと奥村さんの気持ちの違いとか、そういうことがあるのかなと。全国ネットの企業の地域情報の流し方と、地域にあって密着した地域の情報の流し方、そのへんどうなのかということが一点です。

もう一つ、人員削減するときはフリーとかアルバイトとかが先に削られて、四十歳代以上の高収入を得ていた人が切られるんです。そのへん、小泉さんは、社員を残してフリーの人を切ったとか、そういうことはどうなのかなと思って（笑）。

奥村＝ちょっと誤解があったかもしれないんですが、あくまで角川書店の本社が東京にあるということであって、『関西ウォーカー』の編集部は、営業・広告を含めて大阪にあります。私は東京から来た者ですけども、現場にいる編集スタッフ、これは八十五パーセントくらいはこちらの人間です。そういう形でつくってますんで、私を長としての組織のなかでの現場の意識としては、『月刊　神戸っ子』さんと比べて『関西ウォーカー』は関西の意識が薄いなんてことないつもりです。

当然、東京本社からの要望という部分で、いわゆるデリカシーを欠く、関西に対してのデリカシーを欠くというところはありますけども、それは日々闘っているという気概はあります。

いろんな雑誌がたくさんできたらいいな

小泉＝東京感覚と神戸感覚は違うと思いますし、またそれがあるのがいいことだと思います。いろいろあったほうがいい。もっともっとたくさん雑誌ができたらいいと私は思っております。

うちは震災結婚して辞めた子がおります。それから、一昨日、一人首を切りました。その子は「あんまり働かんほうがええよ」ということをみんなに言うてくれる子で、『月刊　神戸っ子』のなかのオウムのような子であったんです（笑）。辞めさせるというのはとてもむずかしいことで、いろいろ露見してきて、やっと辞めさせられましてスッとしてるんです。でも、その子は『月刊神戸っ子』が好きだった（笑）。

うちはずっと募集をかけておりますので、震災後はとても良い人がきてくれるんですよ。たいへん喜んでいます。震災万歳！（笑）ほんとに。なかなかレベルの良い方が来ます。

「編集者になりたいと思ったら、どんなことが必要ですか？」と聞かれたら「あなたが覚悟することだけです」と言います。覚悟や！　と思います。ほんとうの編集者、プロになりたいという意識、これをもたないとなれません。なりたい人は辛抱もできるし、磨きをかけることもできるし、いろいろできると思うんです。覚悟ができない人は辞めてくださいとはっきり言うております。たとえば『月刊　神戸っ子』を卒業してフリーになっている子、たくさんおります。うちが養成学校みたいになっているんですけれど、それもいいなと思っております。

雑誌のジャーナリストが増えたほうが、どんどん面白くなりますから、たくさん本をつくる人が出てきてほしい。東京からももっとつくりに来てほしい。いろいろつくってくれはったらいいと思うんですよ。そのなかでそれぞれ頑張

ったらいいと思うし、覚悟さえあれば続きます。

広報をめぐるコンセプトの変化

池田＝広報とは〈広く知らせる〉という時代から、いまは〈交わる報道〉という交報の時代へと、コンセプトの変化が起きている。多くの平面的な情報を交換していく、それがこれからの時代の一つの流れだということを言っている人がいます。

そういう意味で、パソコン通信とか、新しいメディアがどんどん広がっていって、それを雑誌つくりのなかで取り入れられたのが『リ・セット神戸』の西田さんです。結局それを取り入れた結果どうだったのか、そのへんからなにが見えてきたのか、ちょっとお話いただければと思いますが。

西田＝編集を始めたころはパソコン通信など全然眼中になくて、ハード面でも使えない機械が多かったんです。スタッフの一人で、そういうことに長けた奴がいまして、パソコンでいろんな情報のやりとりをしている。創刊号にも二つくらい原稿をいただいたんです。それなら、『リ・セット神戸』そのもののホームパーティ、窓を開こう。そういうパーティを開いて、そこに原稿を振り込んでいただくような形にしました。

最初、ホームパーティがいろんなところに出回るまで時間がかかったんですけども、こちらからメッセージを送っている間に、全国からいろいろいただくようになって、そこからかなりの原稿が抽出できるようになったんで、ホームページを何ページかつくることができました。ぼく自身が、それまでパソコンそのものに多少抵抗があったもんで、なかなか馴染めなかったんですけども、原稿のやりとりの方法のない者にとっては、すごいことやなと思うんです。

東京で編集を手伝いたいという方がおられて、どういう形でやればいいかをいろいろ相談されたんですけど、ぼく自身、お願いする余裕もなかった。東京なら東京で、今回のことに関してどういう意識を持ってやっているか、すべてそちらでやってくださいということにしました。原稿集めはほとんど向こうの仲間でパソコン通信を通じて集めて、こちらに送ってくる。そういうことはすごいなと思います。

池田＝編集はとくにしなかったんですか。

西田＝そうですね、よほどのことがない限りほとんど載せるという形です。

阪神大震災という、このドタバタのなかで笑い話がいっぱいあるんですけども、そういうことをいつ載せるかなと。当初はなかなか載せられる状況になかったんで、そのへんに気を配ったくらいで、あとは基本的にはぼくらも遊んだんで、それが不謹慎やという批判もいただいたんですけども、それを含めて、だいたい載せる形にしました。

池田＝パソコン通信とか、インターネットのなかで、情報をどう扱うかというのは、これからの大きな課題になってくるでしょう。

関西のフリーラーターは不利か?

発言者D＝フリーのジャーナリストをもっと増やせばいい、増えたらいいとご意見がありましたけれども、原稿料が安い、仕事が少ないということで、フリーで食べていくのはたいへんなんです。私もフリーですが、家賃の心配をしなくてもいい月が、今までほとんどなかったというくらいたいへんです。

東京の出版社から依頼があって関西で取材する仕事と、大阪の雑誌で仕事をする時のギャラは、大きな格差がありました。部数が出てないから予算もない、原稿料も安いと言われたら、「あ、そうですか。でも、この雑誌好きですから」という形で関わってきたんです。

『関西ウォーカー』さんですと、東京で関わっているライターさんの質とか、量とか、原稿料だとか、そういうのがあれば教えていただきたい。もし、格差があるんなら、同じ雑誌でなぜ格差があるのか、その理由を教えていただきたい。

それと、関西で活躍されている方、今からフリーになってやろうと思っている方へ、なにか助言、アドバイスがありましたらお願いします。

奥村＝業界話になってきちゃった。

他社のことは知りません。『関西ウォーカー』でいいますと、『東京ウォーカー』とギャランティはいっしょです。

ただし例外はあります。角川書店と何十年と付き合ってきてくれた会社、大阪で初めて付き合ってくれた会社。あと、関西ですと『関西ウォーカー』一誌ですけども、東京だと小社のいろんな雑誌を助けてくれている会社というのがあります。そういう部分でのギャランティの差というのは正直あります。

ただし、フリーの方に参加していただいて、例えばページいくらでとか、そういう形での格差というのは、基本経理は一個ですので、差はあるはずがないと考えています。

関わる媒体の勉強は最低限必要

奥村＝基本的なアドバイスとしては、好奇心が旺盛で二十四時間アンテナ張ってとか、そういう話はあるんですけども、そんなこと言ってもしようがない。

媒体の仕事をやるんでしたら、それがどういう媒体であって、どういう表現をもって、どういう記事をつくっているのか、といったことくらいは、やっぱり最低勉強してきてほしいですよね。

そういう意味でいうと、関西に来て最初にとまどったのは、「おいおい、この原稿だと○○という雑誌じゃないか」と。「全然違うな」とか、「打ち合わせしたにも関わらず」とか、そういったことはいっぱいありました。最初に関わる場合は、どうしてもそうなると思います。創刊して一年半以上になりますが、創刊当初から関わってきた方々というのは、当然、ウォーカー流の書き方なり、ものの見方なり、取材の仕方なりというのはきちっとできてます。それは経験の問題であって、巷間いわれるような、東京と比べると媒体がないだけ関西はレベルが低いとか、そういったことは全然考えていません。

今後、うちもどんどん雑誌出していきますし、ほんとに人がいないという状況でやってますので、いつでも会いますから、電話して、作品を持ってきてください。仕事が発生するかどうか、それはわから

ないです。わかりませんけども、もしほんとにおやりになりたいという方がいらっしゃるんでしたら、戸をたたいていただくということは全くやぶさかではありません。

スペシャリストになれ

小泉＝フリーライターの方は、スペシャリストになることが大事だと思うんです。映画ができるとか、落語が強いとか、ファッションやハイテクができるとか、自分のスペシャルを持たないとあかんなと思うんです。それなりのスペシャリストになるということですね。それを磨けば、ギャラは高くなっていくと思います。

自分の好きなことを深めていくことが大事だと思っているんですよ。いろんなことができるけれど、これは私のものよ、というものをもっていく。私じゃなきゃ書けない原稿なら、買いに来ますよ、東京から。

雑誌が丸っぽくなる？

江＝『ミーツ・リージョナル』は、編集部の人間が書くパーセンテージが、『Lマガ』『サヴィ』に比べて非常に高い。

フリーの人はたとえば京都のネタでしたら、京都のど真ん中に住んで、もうなにが起こってもすぐわかるという、ある意味でスペシャリストですね。そういう方が多いです。エルマガジン社の仕事一本で食べてる人もたくさんいますし、そんなに悲観する額じゃないんじゃないかなと、ぼくは個人的にはそういうように思っているんです。

東京から発信する、大阪・京都・神戸の情報はステロタイプで深くないというか、地元の人間が読んでいても物足りないことが多い。逆に東京の業界の人間が、我々の雑誌で書くことで仕事の幅が広がったとかいうレベルがある。必ずしも東京へ行ってどうとかいう問題じゃなくて、ここでなにができるかということ、あるいは、なにをしたいかということが明確であれば、自ずと(道は)開けてくると思います。

どんどん作品をもってきていただいてというのは、奥村さんといっしょです。写真であろうが、イラストであろうが、幅広く、いろんな感覚の人を採用してやってますので、どんどん持ち込んで来ていただくといいと思います。

業界の中のことや商売のことをすごく勉強したり研究したりする学生さんが多いんですけど、そんな

こと関係あらへんやん。面白いさかいこれやっていく、というようなレベルやないと、なんか本が丸っぽくなってしまって面白くないなと思ってます。あまり業界の勉強せんと、もっと自分のやりたいことを追求したら、きらっと光るものが出てくるんじゃないかなと思うんです。

池田＝なんか職業相談みたいな形になった（笑）。

震災を経たあとの地域情報誌のあり方

発言者E＝私は広告会社の仕事をしています。震災でひどいことになったのはふた月くらい。ちょっとゴタゴタしましたが、その後、元に戻りました。前年比をなんとかクリアしてやっています。

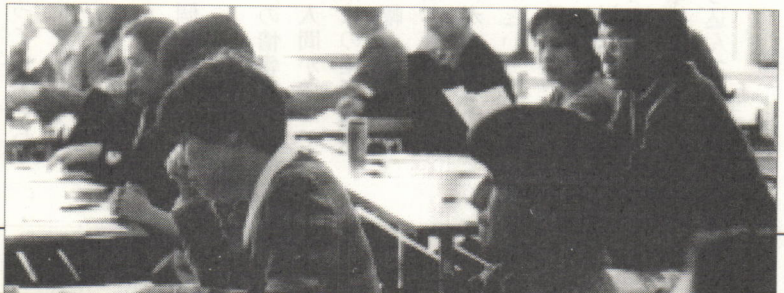
どんどん新しい雑誌が出たらいいと、私もそう思うんです。それでみなさん、現在やってらっしゃる編集長という立場をちょっと離れて、地域情報誌に限って、私だったらこういう新しい雑誌をつくってやるんだがな、というのがあれば、ぜひともお聞きしたいと思っているんです。

錐もみ戦法で

小泉＝一つの本を続けていくには持続力というか、そういうものが必要です。さっき『リ・セット神戸』さんがしんどいとおっしゃってましたけど、すごくよくわかるんですね。

三号雑誌といって、三号目でようつぶれるんですよ。それぐらい、続けることがとてもたいへんなんです。休刊するというのはたやすくて、うち一度『オール関西』というのを休刊したんですよ。発刊するのに一年かかったんですけど、復刊するときはすごい力が要りまして、八年くらい休んで、復刊に三年くらいかかったんです。発刊するのはたやすいけれど、続けていくというのがとてもたいへんでした。『リ・セット神戸』さんのように六号続いてパッと消える、これもまたいいかもしれないと思っています。

私は、錐もみ戦法と申しますが、ちいちゃい穴を



キリキリと開けていくと、ミニコミであろうと大きな穴で破壊力ができるという、そういう仕事をしたいんですよね。

神戸祭りの打ち合わせの時にいろいろ問題が出たんです。祭りの創出というのは街にとっては大事なことなんですね。都会の祭りは、とてもむずかしいんですよ。今度、この祭りを海の記念日に変えていくというわけです。三都祭りにしよ。大阪の天神祭りと京都の祇園祭りの間に神戸祭りを入れようか、と。東北三大祭りみたいにもっていこうという話があるわけです。

海の記念日は全国でしているからあかん、と。やめなさいと言う人がいる。みんなの総意をどう集めていくかというのはとてもむずかしい。まちのグランドデザインというか、みんなが知恵を集めてやっていかないといけません。

祭りをひとつ動かすために、神戸市の九区にそれぞれ実行委員会があって、お年寄りから若い人までいるわけです。震災の時に、これが生きてきたんです。

ちっちゃなところから大きいものにもっていく、それを何年も何年も続けていると、それが大きなパワーになっていく。今まではちっちゃなお祭りだったけれど、最初から見れば徐々に徐々に大きくなっていっているわけです。ちっちゃな力でもそれを積み重ねていくと、大きくなっていく。そこから世界へ発信できるようなものになると思うんですね。

そういうことを南京町の華僑の人なんかはよく知っていて、《海の盆》という祭りを世界的にしよう、《風の盆》に対抗しようと言っている。その心意気が素晴らしいと思うんですね。

地方からの発信とは、ちっちゃなことから大きいものを生み出していくことですね。世界的なものにするとか、地球市民でありたいとか、そこへもっていくキーワードが地方にあると思うんです。

新しいまちづくりをやっていきたいというのが、私の気持ちでございます。いまトアロードに編集室がありますけれど、できればトアロードの復興祭をやって、界隈の面白いまちづくりをお手伝いできたらなと、ジョイント役だと思うんですけれど、そういう役割ができたらと思っております。

地域密着の雑誌はもっとできる

奥村＝この会に出席する前に、一度うちの編集部に主催者側の井上さんにお見えいただいて、ちょっとお互いムッとするようなことを言い合ったりもした

わけなんですけども（笑）。『関西ウォーカー』が地域密着型でありながら、震災に対してこれしかできなかったのかみたいなところで、ちょっともめたところがあるんです。

私がやってきた道というのは絶対間違っていないと思う。ただし、個人としての出版人としては、ああいうこともすべきだった、こういうこともすべきだったといろいろ考えてます。ただこれは『関西ウォーカー』でやることじゃないだろう。惜しむらくは、そういうことができる媒体が欲しかったなというのが、正直なところです。

今日のテーマは「地域情報誌の明日を語る」ですけれども、本音のところをぶっちゃけて話してしまえば、こういうテーマでこういうシンポジウムが成立しなくなるような日がくればいいなというふうに考えてます。雑誌というのは地域に密着しているのがいちばんいいに決まっている。『アンアン』という、女の子に人気が高い雑誌があります。あれはぼくは東京誌だと思っています。全国誌では決してない。『アンアン』が東京にあるんであれば『カンカン』でもなんでもいいですけども（笑）、あの手の雑誌が関西にあっていいだろう。そのための市場があるということは、角川書店は少なくとも『関西ウォーカー』で証明した。だから我々としては、出版人としても、商売人としても、今後関西、或いは他のエリアで地域情報誌はどんどんどんどんつくりあげていきます。十二月六日に一冊創刊します。あと来年も一冊創刊します。興味のある人は来年早々、新聞の求人欄でも見てください。たぶん編集者募集という形で載っているはずです。

新しい二千年型の地域雑誌

江＝私の勤務しているエルマガジン社というのは唯一、関西の資本、元々関西からでた雑誌中心の出版社です。その中でどういう雑誌をつくりたいか、見通しはどうか。

今奥村さんがおっしゃった『アンアン』がどうやとか、これはファッション誌や、これは情報誌や、これはカタログ誌や、そういう切り方、それプラス年齢層がこうで、このターゲットに絞ればこうだとか、若い女性の雑誌をつくれば広告が入るとか。八十年代は特にそういうことでやってきた。

けれどもぼくらの場合は（対象としている街が）京都・大阪・神戸でして、読者も、もっと地道に獲得してきた。

七十年代以降、カタログ誌というスタイルができてきて、それをつくろうとして分析したり、『アンアン』のやり方がこうやとか、『ぴあ』を徹底的に真似たりとか、ありましたけれども、そういうのを全然なくして、うちで雑誌を考えるんだったら、どんな雑誌がセールスとしてあるんやみたいなとこから、『ミーツ・リージョナル』は始めました。

ロンドン、パリにはいろんな雑誌があるんですけど、それはほんまに街の雑誌でして、我々の雑誌よりも少ない部数でやってきていて、なおかつ力がある。十万部やったらマスなんか、一万部やったらマスでないんかという、そこらへんの大衆論といいますか、そのへんをがっちり考えていかんと、地域出版なんかやっている意味がない。

いまは『ミーツ・リージョナル』をつくっているわけなんですけども、もしまた新しい雑誌をつくるんであれば、そのへんを打ち破って、もっと新しい二千年型の雑誌を考えたい。それは、ここに来てらっしゃる人から、これは情報誌やとか、これはファッション誌やとか、これは音楽誌やとか、そういうカテゴリーにはめられへんような、とにかくこれは『ミーツ・リージョナル』やないかみたいな、個性と出す意義と意味を考えて、大阪・京都・神戸でやっていきたいなと、そういうふうに思っています。

発言できる場があるのは素晴らしい

西田＝四号まで出す間にいろいろの方に励まされました。当初から六号以降のことをよく言われていたんですけども、ぼくらその余裕がとうていなくて、とりあえず六号までしか考えていないんです。ぼくにもっとパワーと出版に対する情熱があれば、一つの本、ミニコミというんですか、自分らがなにか言える、メッセージを出せるような本を続ける可能性はもちろんある、多少でもある。

そういう形で、自分がなにかものを言える場所があるというのはほんとに素晴らしいことやということを今回つくづく感じました。被災者・被災地という言葉に埋没しなかったのも、こういう場が多少でもあったから、なんとか自分を支えてきたのかなということがあるんです。いろんな形

でこういう場が広がっていくということは、まちの文化なり、これから生きていく上で楽しくさせてくれるようなものだと思うんで、できるだけそういう場が広がるような、社会になればなと思います。

折りがあれば出版の仕方やルートとか、そういうところを勉強して、多少は意見を言っていきたいなと思っています。

江さんからも、しんどかったら、うちのページを提供しますよと、非常にありがたい言葉を言われたことがあるんです。そういう形でもつくっていけるんで、大きな出版社がそういう弾力性をもっていただければ、また可能性があるかなと思います。

新しい媒体の可能性

池田＝横のつながりというか、出版編集者のネットワークとか、そういうものがこれから大事になってくるんじゃないかなという気がします。これから期待されている関西ＤＴＰ協会の富永さん、どういうイメージをもっていらっしゃいますか。

富永＝兵庫県で「出版業界と電子化の未来」というシンポジウムがありまして、出版業界はこれからかなりの成長分野だと予測されております。そのことは間違いないみたいで、ただ、表現方法としていろんな可能性がある。これからフリーで仕事をしていこうという方は、スペシャリストとしての勉強と、いろんな表現方法を勉強するべきでしょう。これまでは紙媒体にしかできなかったものが、いまはＣＤ―ＲＯＭにしたり、インターネットを通じて世界に発信できる。

今はインターネットブームですけど、そこで働いている人は人手が足りない。ライターにしても、デザイナーにしても足りないという状況が続いてます。インターネットの技術はわからへんと、そう言ってしまえばそうなんですけど、そこで書かれている内容は、スポーツカーの情報であったり、ファッションの情報であったりする。

ＤＴＰ協会としては、冒頭に言いましたように、人と情報のネットワークをつくるということです。こういう人が欲しいというときに、需要と供給のコミュニケーションのバランスがいろいろあって、対面ではちょっとむずかしいと思うんですけど、ネットワークというのはこれからどんどん進化していきます。ファッション情報や旅の情報を書いている女性ラ

イターがいますが、パソコン通信で情報発信ができることを、あちこちで知ってもらっているというだけで、東京や他の地域からでも仕事が舞い込んでくる。

そういう可能性というのはますますふえると思いますので、積極的に勉強されたらと思います。そんなにむずかしいもんではありませんし、お金のかかるものでもありません。その支援を私どもも今後ますますやっていきたいと思っております。工房は震災復興の一環として建った施設ですので、多少お金はいただくんですが、他のセンターなんかに比べたら格段に安い利用施設になっておりますので、利用していただけたらいいなと思います。

現地と外側との回路づくり

井上＝震災後、全国に神戸の人たちの状況や声を伝え、自分たちにできることを考えたいとつくられた冊子『神戸から』の方に来ていただいています。何かありませんか。

発言者F＝私はこの雑誌の編集には直接携わっていません。ボランティアスタッフとか、フリーの人も含めて、非常に少人数でやっています。今回も十一月の一日から五日まであるイベントに出てたりしていて、誰も来られないということで私が来ました。

私が知っている範囲で、この雑誌の立ち上がりをしゃべらせていただきます。

震災があって、主にテレビとか新聞なんですけど、外からやってきて取材して帰る。外部の視点にしかならない。一所懸命取材されても、それが結局、外の者がなにを言っているんやという、そういうふうにしかならない。

岩波の『世界』で鎌田慧さんとかが、震災復興に対する提言をされて、それは注目を浴びたんですけど、それも行政批判が表に出ていて、悪者をつくってそれを糾弾すればいいという、読んでいる人にはそういう視点にしか取れないような書き方です。

そういうのは神戸市民の人たちはもう卒業している。行政とどうコミュニケーションを取りながら復興プランを進めていくかというのが、今、ほんとに大事ないちばんの問題で、そういう視点が非常に欠落している。

神戸の外の人、これはいろいろ層があると思うんです。大阪とか京都の人

が知っている神戸の現状と、東京から見た現状、遠くにいくほど薄れていくようなことがあると思うんですけれども、ともかく、現地の声や生の声が伝わらない。この雑誌のいちばんのやりたいことは、〔現地とその外側の回路づくり〕、この雑誌を通じてなんとか現地の声を外に届けたいということが、この雑誌の趣旨だと聞いてます。

被災者ジャーナリズム

『神戸から』の編集主幹をやっている津村喬という人間がいるんですけれども、彼が使っているのは、〈被災者ジャーナリズム〉という言葉なんです。

マスコミの人間が取材して書くというのではなくて、被害にあった人間、自分たちがライターになったり、あるいは編集したりという形で、被災者自らが雑誌を立ち上げる、そして発信していく、一つのスタイルみたいなものをつくりあげたいというのも、この雑誌に込められている任務と聞いてます。

ですから整理しますと、一つは〔外部と内部、現地とその外の回路づくり〕、一つはこういう言葉が適当かどうかわからないんですけど、〔被災者ジャーナリズム〕というのがあるんだとしたら、それのスタイルづくり、この雑誌でその可能性を探ってみようというところでやっております。

こういう雑誌をやるのは非常にたいへんで、雑誌として流通させるには、雑誌コードをもらって、取次さんにお願いして書店に流通させるというのが、一般的なものです。雑誌コードというのは取るのはなかなかたいへんで、休刊したところは雑誌コードを高く売れるぐらい価値のあるものなんですけれど、なかなか取れない。『神戸から』もそれを取れてないんです。ですから、営業的にも苦しい状態で、地域地域にキーパーソンを見つけて、そこでまとめて扱かってもらう、そういうようなことでしか広がっていません。

今日ここにお集まりいただいた方々は、地域から情報を発信する価値について関心をもっておられる方だと思いますので、ぜひ読んでいただいて、趣旨に賛同していただけるなら、そういう

キーパーソンになって、こういう雑誌があるよという感じで広めていただければと思っています。

地域の情報は地域の人の癒しになる

池田＝一つの情報が人々にとって癒しになって、物事を語っていくということが、そこに住んでいる人たちの一つの慰めにもなっていくという。被災地のなかにおける雑誌をつくっていく役割というのがあるんじゃないかという気がします。

イランの映画でこういうのがありました。イランで大震災があって、それを取材に行った映画監督が被災地を取材してまわって、どんどんどんどん落ち込んで行く。落ち込んでどうしようとなった時、被災地の住民は、ワールドカップの映像を見るために、一所懸命にアンテナを立てようとしていた。そういう姿を見て、その監督が励まされて、もう一度希望をもちながら映画をつくりはじめる。そういう内容でした。

それと同じように、情報というのは、なかなか目に見えなくて役に立たないかもしれないけども、一つの地域に住んでいる人たちにとっては、非常に大きな癒しみたいな効果を果たすことがあるんだろうなという気がします。

神戸では最近、寅さんが長田に行って長田のまちの人が少し元気になった。イチローがよく頑張ってくれて、日本シリーズが盛り上がって元気になった。また、隣の小泉さんは、地震は一つのエネルギー源だという形で、なおはつらつと頑張っていらっしゃる。そういう生き生きと元気な声が聞こえる反面、仮設住宅に住めるのは二年といわれているけど、十年も出て行けないような人も出てくるだろう。声をなくして、あるいはか細い声で生きている人もたくさんいる。そういう人たちもきちっと見ていかなくちゃいけない。

そういうジャーナリズムというのは、一体なにか。新聞がやっていかなくちゃいけないのは当然でしょうけれども、そういうところにもやはり、地域の情報誌としての目を注いでほしいという気がします。

震災を受けたあとの社会

地域情報誌、これからどうなるんだろうか。パソコン通信とか、インターネットとかいう話もありました。ニューメディアがどんどん広がっていくでしょうし、いわゆる上からのマスコミとミニコミの境

界はどんどん薄れていくでしょう。

これからはもう新聞というものに頼らずに、ネットワークはどんどん広がって、マルチメディア社会になっていくでしょうし、十年たったら情報の流れという面で、社会はガラッと変わっているかもしれません。

関西人にはおしゃべりの人が非常に多い。おしゃべりの文化がわりと根づいているのは日本の中でも関西の強みかもしれない。最終的にネットワークが進んだ時には、地域の人たちが、どれだけ討論する力とか、おしゃべりする力を持っているかという、そのへんのところにかかってくるだろうなという気がします。

地域文化とか、地域情報誌のあり方というのは、目に見えないわけですね。目に見えないものをどう築いていくかというのが問題でしょうけれど、それはなかなかわからない。そういう時にぼくは言葉をよくじっと睨んで考えます。地域情報誌だったら、いちばん最初に言いましたように、〈地域の情けに報いる〉〈情けを報じる〉、情報を単なるデータでなく、いわゆる情けに報いていくという、人間的な世界というのをどう滲ませていくのか。私たちの仕事のなかで、それをどう生かしていくかということが、やはり問われてくるでしょう。そういうことをやっていく中で、明日は少しずつ開けていくんじゃないかなと思います。

今日は、どうも長い時間、みなさん参加していただきまして、ありがとうございます。これで終わります。（拍手）

シンポジウムに求めていたもの、そこから得たもの

二年前の私は、地域情報誌になんの期待も抱いていなかった。コンサート情報を知りたくてちょくちょく買ってはいたが、記事はほとんど読まず、古新聞と一緒にゴミに出していた。情報誌の読者は十代、二十代が中心だから、四十歳過ぎた私の読む記事がなくても当然だろうと、不満を持つこともなかった。とはいえ仕事が仕事なので、角川書店が『関西ウォーカー』を創刊すると聞いたとき、「売り込んで仕事をもらおう！」ということぐらいは考えたものだ。が、それも、参考のために入手した『東京ウォーカー』を開いて即座に、自分の出る幕はないと判断を下していた。

94年秋のこと、「近ごろ元気のいい関西の情報誌について書かないか」との話が舞い込んできた。『関西ウォーカー』のみならず、従来からあった『Lマガジン』や『ぴあ』の売り上げも順調だし、アメリカ村発のファッション誌『カジカジ』も創刊された。その元気の秘密を、関西にいる編集者として分析してみないか、というわけだ。当時たまたま、ある月刊誌に掲載された『関西情報誌の現状ルポ』を読んで、「それはちゃうで」と違和感を抱いていた私は、二つ返事で仕事を引き受けた。原稿の締切は、95年1月末だったと思う。

というわけで、震災前の私は、関西で発行される情報誌のほとんどを毎号買い集め、ああでもないこうでもないと頭をひねりながら、原稿を書き進めていたのだった。

そこで立てていた仮説のあれこれをまったく無意味なものに変えてしまったのが、95年1月17日の震災だった。「地域情報紙は地域の人々に何ができるのか、何をしようとしているのか」、その視点から、私は情報誌をとらえ直すことになった。

依頼されていた原稿は、内容を変更し、締め切りを延ばしてもらって書き上げた。結論を端的に言えば、1、従来の情報誌には、読者が主体的に働きかけ、作り上げていくページがなさすぎる。情報を一方的に流すのではなく、双方向性を持った雑誌作りが必要なのではないか　2、情報の内容も「遊び」に偏りすぎている。たとえば、今回の震災で初めて「市民権」(?)を得たボランティア関連記事など、新しい分野、社会的活動の情報も、読者は求めているのではないか、といったことだ。

シンポジウムを企画したのは、このような問題意識を抱えていたからだ。

既存の雑誌に要求を突きつけるのは間違いであり、ほしいものがあるなら自前で作るべきだ、というのが、シンポジウムから半年たった私の「総括」だ。現在は、インターネットのような、情報発信の可能性を拡げてくれるメディアもある時代なのだから。

矛盾や葛藤を抱えながらも、それぞれの場で「最善の方法」を模索してこられたパネリストの報告と意見には、そのためのヒントや乗り越えるべき課題が数多く含まれている。それを生かせるかどうかは、これからの私たちの仕事次第だ。

95年度アミ編集者学校事務局長　井上はねこ

＊文中に書いた私の原稿は、図書館とメディアの本『ず・ぼん』2号（新泉社発行）に掲載されている。ご一読いただければうれしい。

震災から数カ月経つと、テレビ・ラジオ・新聞等のマスメディアが、自分たちの震災報道を再点検し始めた。ところが出版界では、そのような動きがまるで見えてこない。出版・編集に携わる者としてそれでいいのだろうか、という問題意識が、今回のシンポジウム、およびアンケートを実施したきっかけの一つだ。

また、大手出版社がなく、社員数人の編集プロダクションやデザイン事務所に勤務する者、フリーで働く者が多いという関西の現状を考えて、その実体を掴みたいという思いもあった。他ならぬ私たちアミ編集者学校のスタッフ自身が、物理的・精神的・経済的に大きな打撃を受けており、それを知らせたい、知らせるべきだとも考えた。

◆アンケートの配布と回収

アンケート用紙はシンポジウム案内のリーフレットに挟み込み、被災地である神戸市内の書店（ジュンク堂各店、海文堂書店、コーベブックスさんちか店）、旭屋書店本店（大阪・曾根崎）、ジュンク堂京都店などに置いてもらったほか、アミ編集者学校の講師、卒業生、在校生、事務局スタッフ、およびその各々が仕事を通して出会った編集・出版関係者に配布した。また新聞数社に、アンケート募集を紙面で紹介してもらった。回答は、ファックスや郵便、手渡しで受け取った。

不特定多数の手に届いたこともあり、編集・出版とは直接関係のない職業の方（たとえば教師など）からの回答もあるが、報道・出版のあり方への意見や批判に関係者・部外者の区別は無意味だと考え、掲載させていただくことにした。

◆アンケートの読み方

質問内容は左ページの通りだが、読みやすさを考えて、被害や仕事への影響等、状況を尋ねた部分（パート1）と、意見・提言を求めた部分（パート2）とをわけて紹介している。パート2の回答番号は、パート1のプロフィール表最上段の数字と対応している。

回答内容は、明らかな誤字脱字以外は、判読可能な限り原文を再現した（送りがななど、表記を統一するための手直しは一部行った）。氏名表記については、匿名希望が多かったため、統一して無記名とした。

The『Shinsai』
—出版クリエイター80人の震災体験と提言—

1996年6月20日　発行
編集・発行　アミ編集者学校事務局
〒530　大阪市北区西天満5-6-12
グレース・アイ401号
TEL. 06-314-0219
デザイン・レイアウト　大西昇子（マル工房）
印刷・製本　爲國印刷株式会社
定価　880円（本体価格855円）

アミ
AMIE
編集者学校

定価 880円（本体価格855円）